

比婆道後帝釈国定公園 船通山

自然観察モデルコース

ガイドブック

～改訂版～



島根県

もくじ

はじめに	1	亀石コース	42
コース図	2	登山口まで	42
船通山とは	3	駐車場から溪流に沿って	42
公園には	3	ハイヌガヤとチャボガヤ	44
野山に入る前に	4	土壤動物	45
マムシに注意	5	溪流沿いを奥深く	47
マムシにかまれたら	5	カタツムリのなかま	49
ヤマカガシに注意	6	葉っぱの違い	50
スズメバチに注意	8	溪流から急登へ	51
危険な植物	9	ふるさとの民具・ふろり	51
キノコにも注意	10	急登から横手道へ	52
船通山と製鉄文化	12	船通山の鳥	53
鳥上滝コース	14	ツルアジサイとイワガラミ	54
登山口まで	14	横手道を行く	55
森のマント	14	ツルシキミとカラスシキミ	58
駐車場から溪流に沿って	15	セミのなかま	59
春の樹の花	17	横手道から愛宕道へ	60
溪流に生きるゴギ	18	ゆりかご作りの名人	61
川の中の昆虫たち	19	秋の味覚	62
水質と水生生物	20	船通山にみる万葉の花たち	65
溪流に沿って鳥上滝まで	21	船通山の四季	66
山菜あれこれ	23	終わりに	67
鳥上滝	25	観察記録	68
サンショウウオの仲間	26	色をつけてみよう	70
鳥上滝から水場まで	27	あとがき	71
黄葉と紅葉	31	索引	72
水場から尾根まで	33		
船通山の地形	35		
尾根から鞍部まで	36		
鞍部から頂上へ	37		
頂上	37		
赤トンボの大群	38		
カタクリの知恵	40		



はじめに

島根県は、山、川、海、湖などの自然環境や自然景観資源に恵まれ、そこに生息、生育する野生生物も豊富で、四季折々の変化に富んだ自然に親しむことができます。

このような恵まれた自然環境の中で、身近な自然に親しみ、自然との豊かなふれあいを求め、また、自然への理解を深めるため、県内各地で自然観察会が行われています。

自然をよく知るためには、自然のしくみや動植物などについて、自然観察の指導員が直接解説してくれる自然観察会に参加すると、より詳しく理解することができますが、「いつでも」「どこでも」「手軽に」参加できるかというと、そうはいきません。

そこで、県では、県内各地の自然公園内、自然歩道、登山道が整備されている地域などの自然を観察しやすい場所を自然観察モデルコースとして選定し、一人でも自然観察ができるように、コースのガイドブックを作成してきました。「船通山自然観察モデルコースガイドブック」もその中の一つとして昭和61年に作成しました。

しかしながら時の移ろいと共に自然観察の年齢層は広がりを見せ、自然観察の希望者が多くなり、ここ船通山で行われる「カタクリ登山」や「ブナ林自然観察会」は、とても多くの参加者のため地元講師では対応しきれない状況になってきました。また、植生の変化が生じるとともに、そのガイドブックは、二つある登山道的一方だけの解説であったため、当初の役割をはたしきれなくなってきました。そこで、このほど見直しを行うと共に、残されたもう一つの登山道も併せて解説することとしました。

このガイドブックを見ながら船通山のすばらしい自然を満喫し、少しでも自然の持つ大切さを感じとっていただければ幸いです。そして、ここの自然だけではなく、それぞれの皆様の周りにある身近な自然を大切にする心と行動が広がることを期待しています。

最後の観察記録のページに、少しでも多くの植物の名前がメモされたり、皆様方の素直な感想でいっぱいになることを念じております。それでは、この神話の山「船通山」をごゆっくりお楽しみ下さい。





コース図



自然をとうとび、自然を愛し、自然に親しもう。自然に学び、自然の調和をそこなわないようにしましょう。美しい自然、大切な自然を永く子孫に伝えよう。「自然保護憲章」の一節です。

船通山での動植物の採捕は禁止されています。

船通山とは

船通山は、島根県奥出雲町と鳥取県日南町の県境に位置し、一帯は比婆道後帝釈国定公園に指定されています。標高は1142.5m(三角点)で、山頂は広く四方が展望でき、大山や比婆山連峰、晴れた日には、三瓶山や島根半島、条件を整えばさらに遠くに隠岐島も見ることができると、360度の自然のパノラマを堪能できます。山の名前は神話に由来し、やまたのおろち八岐大蛇伝説の須佐之男命すさのおに由縁の深い山で、頂上にはあめのむらくものつるぎ“天叢乃劍出頭之地”の記念碑が建立されています。

船通山登山道は、島根県側からは鳥上滝コースと亀石コースがあります。鳥上滝コースは、このコースの途中にある鳥上滝の名をとったもので、溪流沿いの石畳の道と滝、そして自然林の山道を歩く、やや登りのきついコースです。鳥上滝は約16mの高さで、斐伊川の源流といわれ、島根の名水100選にも選ばれています。



宣揚祭 (毎年7月28日)

亀石コースは、亀石谷の名前をとったもので、溪流沿いの緩やかな登りとブナ林の横手道をゆっくりと散策できるコースです。これらの二つのコースをぐるりと一周するのも楽しく、今回はこの両方のコースを自然観察コースとして紹介します。

公園には

公園と呼ばれるものには大きく分けて自然公園と都市公園の2つがあります。このうち自然公園には国立公園、国定公園、都道府県立自然公園の3種類があります。

国立公園とは、わが国の風景を代表する傑出した自然の風景地を環境大臣が指定するもので、本県には大山隠岐国立公園(隠岐、島根半島の一部、三瓶山)が指定されています。国定公園とは、国立公園に準ずる優れた自然の風景地を環境大臣が都道府県の申し出により指定するもので、本県には安蔵寺山や匹見峡に代表される「西中国山地国定公園」と、吾妻山や船通山に代表される「比婆道後帝釈国定公園」があります。都道府県立自然公園とは、都道府県が条例に基づいて独自に指定するもので、本県では宍道湖北山をはじめ、清水月山、

立久恵峡、鬼の舌震、竜頭八重滝、江川水系、断魚溪・観音滝、千丈溪、浜田海岸、蟠竜湖、青野山の11箇所の県立自然公園があります。

自然公園は、すぐれた自然の風景地を保護することと遊歩道や広場、キャンプ場等を整備して適正な利用を図ることを目的としています。そのため自然公園の中で、建物を建てたり、木を切ったり、土や石を取ったりするには、国や県の許可が必要となります。また、貴重な動植物を許可なく採捕することも禁じられています。

このように、自然公園では自然を守るためのルールがありますので、皆さんもむやみに動植物を採捕したりして自然を壊さないように注意して自然観察をしましょう。なによりも大事なことは、自然を大切にする心を身につけることなのでから……。

野山に入る前に

自然を大切にする心を身につけるためには、自然に親しみ、自然に学び、自然のしくみをよく理解することから始まります。自然に親しむためには、自然の中に入っていかねばなりません。自然の中には、かぶれる植物や、毒を持っている植物、動物などがありますが、あらかじめそれらに対する知識や対応方法を知っておけば、決して恐れることはありません。自然観察をする前に、野外における危険な生物についてよく知っておきましょう。また、解説員等の方の解説をよく聞いて、対処しましょう。

自然の中に入っていく時には、長袖シャツや長ズボンなどの服、双眼鏡、虫眼鏡など用具の準備が必要です。自分なりに工夫して、自分の自然観察スタイルを考えて見ましょう。



マムシに注意!

自然観察しながら歩いている時、注意しなければならないのがマムシです。船通山はマムシが多い山ですが、マムシがいるからといって、怖がって自然観察することはできません。あらかじめマムシの見分け方や対応策等について知っていれば、決して恐れることはありません。

マムシは猛毒を持っているので、かみつかれると死に至ることがありますから、もし出会っても手を出さないことが大切です。マムシはおとなしいヘビで、自分から攻撃するのではなく、しかけられたら身を守るために攻撃するわけです。遠くから長い棒でつついてその場は去っても、必ず身を守るために数メートルの範囲で当分の間身構えていますので注意が必要です。もし、先につつかれたマムシなら即座に攻撃してきますので気をつけましょう。マムシに出会ったら、少し待って見ましょう。人の気配を感じて逃げてくれるはずですが、ただし、おなかに子どもを持っている時期(7～8月)のマムシは防衛反応が強く危険と言われていしますので注意して下さい。また、マムシは目で見て攻撃するのではなく、目と鼻孔との間にあるくぼみで相手から発せられる赤外線を検知して、それに対して攻撃をしかけるのです。ですから、草むらなどに入るときには、素肌を出さないように、長靴などを着用することがマムシにかまれないための一つの方法です。 ▲マムシの毒牙



マムシは、他のヘビに比較して頭がほぼ三角形でやや大きく、頸部のくびれが明瞭で、胴には大きな銭形斑紋がありやや太くて短く、尾が急にくびれて短いという特徴はみなさん方も良く知っていると思います。体長は60cm以下ですので、短くてずんぐりしていると思えばよいと思います。

マムシにかまれたら!

もし、マムシにかまれたら、直ちに逃げてください。マムシは、2度、3度と連続して攻撃することがあります。また、可能であればかみつかれたのがマムシかどうか確かめてください。マムシのかみ跡は、普通2本の毒牙の跡がはっきり残ります。

①あわてないこと。

マムシの致死率はスズメバチよりはるかに低く、すぐに死にいたることはないので、周りの人がパニックとならないように、落ち着かせることが大切。

②かまれた部分を動かさないようにし、体を休ませること。

走ったりしない。(マムシにかまれた動物は、ただひたすらうずくまってじっとしている。)

③傷口からできるだけ毒を吸い出すこと。

マムシの毒は、血液の中に入って毒性を発揮するので血を飲み下しても影響はないが、専用の毒吸出し器を持ち歩くとよい。

④血行の鈍化を図ること。

かまれた場所から心臓に近いところを幅の広いタオルなどで縛る。この場合、あまり強く縛らずに指が1～2本通る程度とする。血行を止めてしまうと、その部分の被害が強くなる。また、縛る場所は、30分程度で上部に移動するようにすること。

⑤できるだけ速やかに医者のもとに運ぶこと。

その際、血行を早めないように背負ったり車に乗せたりする。また、精神的ショックを和らげる工夫も必要である。血清は、1時間以内が最も有効とされているが、数時間後でも有効に使えとも言われているので、医者による適切な処置を受ける。

ヤマカガシに注意!

ヤマカガシは、比較的最近まで毒ヘビとしての認識のないヘビでしたが、今では猛毒を持つヘビとして広く知られるようになりました。マムシに比べると、身近に生息しているごくありふれたヘビであり、出会う機会をはるかに高く、しっかりとした知識をもつことが大切です。

生息する場所もあまり選びませんが、山や田畑、民家のまわりなどで最も普通に見られるヘビで、体長は1m前後で全体として黒っぽく、左右の側面に黒い斑点が並び、特に前半身では黒斑の間に赤い模様が目立ちます。しかし、斑紋や色彩には変異が多く、幼蛇には首の後ろに黄色い帯があるので良く目立ちます。

ヤマカガシは、マムシやハブと違って、人が近づいただけで攻撃的防御のためにかみつくことはなく、素手でつかんだりもてあそんだりしてかまれる場合が多く、これまでにかまれた事例はすべてが指や手でしかも男性に限られています。刺激すると、頭をかなり高く持ち上げたポーズをとることが多く、コブ

ラのように首から腹の一部を広げ威嚇します。

ヤマカガシの毒は凝血毒で、血液凝固が阻害され溶血作用による内臓出血などを引き起こします。ハブの毒は、マムシの8倍、ヤマカガシはハブの10倍の毒性をもつといわれています。このことから、いかにヤマカガシの毒が強烈であるかわかると思います。また、致死率も10%とマムシやハブに比較できないほど高くなっています。

このほか、首の後ろにある頸腺を強く押すと黄色の毒液を出します。これが傷口や目に入ると激痛を感じますのでこれも注意しましょう。

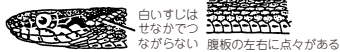
ヤマカガシには、毒腺はありますが毒牙はなく、マムシのように毒液注入用の管や溝はありません。また、毒腺の開口部は、口の奥の歯と歯の間の歯ぐきにあるため、かまれてもめったに毒が注入されることはなく、必要以上に恐れることはありません。したがって、捕まえて遊ぶなどしないようにしていればまず大丈夫です。



ヤマカガシ黒化型

船通山でみられるヘビ

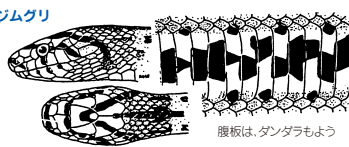
ヒバカリ



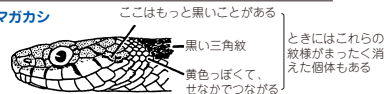
シロマダラ



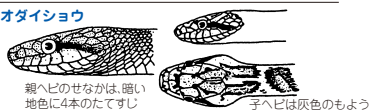
ジムグリ



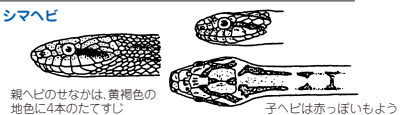
ヤマカガシ



アオダイショウ



シマヘビ



「大阪の自然」より

スズメバチに注意！

最近秋になるとスズメバチの被害がマスコミで報道されています。島根県内でも、課外授業やハイキングなどでスズメバチに刺される被害が少なくありません。ここ船通山でも、最近になってスズメバチの巣をいくつか取り除いています。

野外における危険な生物の中で最も恐ろしいのがスズメバチです。一般的にはマムシの方を恐れますが、死亡率からいえばスズメバチの方がはるかに高いのです。したがって、一般的な認識以上に注意を払う必要があります。ハチの習性を良く知りハチに出会ったときに備えましょう。

たくさんいるハチの仲間のうち、刺すのはほんの一部の仲間しかいません。スズメバチのほかではアシナガバチ、ミツバチ、マルハナバチの4つのグループに限られています。また、刺すのはメスだけです。巣を守ったり、餌場を占拠したりする働きバチはメスだけであり、これらのメスが刺すのです。よくハチは一度だけ刺すといわれますが、それはミツバチだけです。ミツバチの針は、一度刺すと抜けてしまい、肌につきささった状態で残るからです。

〈 攻撃の4段階 〉

① 巣への接近に対する警戒行動

巣の出入り口や表面のハチが警戒(翅音を出す)し出すとともに一部のハチが巣を離れて周辺を飛び回ります。

② 巣への接近に対する威嚇

巣の周辺数メートルから10数メートルの範囲内を飛び回っていた偵察ハチが近づいて大きな翅音をたてて飛び回り、カチカチという威嚇音を発します。これは「これ以上近づくと攻撃するぞ」というスズメバチ特有の警告です。

③ 巣への間接的刺激に対する攻撃

巣のある部分に振動を与えたりすると、威嚇のハチや巣から飛び出したハチがまっすぐ飛びかかってきて刺します。

④ 巣への直接的刺激に対する攻撃

この場合は、ハチは威嚇なしに直接飛んできて刺します。興奮の激しい場合は、噛みついて離れず、何度も突き立てます。現場から遠ざかっても、かなりの距離まで追いかけてきます。

追いかけられたら

・動かすにじっとしている

ハチは、動きの遅いものや静止しているものをうまく判別できないようですが、その時々によって効果は違います。

・巣を刺激して追いかけられたときは、地面に伏せるなどしてハチの攻撃をかわした方が良い場合もありますが、攻撃をはじめたハチは、執拗に攻撃してくるので、巣の近くにいるのは危険です。

野外でよくスズメバチが単独で飛んできて人の周りを飛び交うことがありますが、この場合はおどしてもなんでもないので、じっとしていることが大切です。ハチは、そのうちに飛び去ってしまいます。また、ハチは、白いものよりも黒いものの方へ良く攻撃するようです。

刺されたときには

- ①冷たい流水などで患部を洗い出しながら、毒を血液といっしょにしぼり出す。毒液吸出し器があると便利です。
- ②痛みやはれは、水や保冷材などで冷やします。
- ③市販の抗ヒスタミン剤を含んだステロイド軟膏をぬるとよいでしょう。
- ④気分が悪くなったり、息苦しくなったりした場合は、ショック症状の前兆の可能性が高いので、すぐに病院へ行き治療を受けましょう。

危険な植物

次に、ここ船通山で見られる危険な植物について説明しておきます。

ハシリドコロ…溪流沿いに春早く芽を出し、外側が暗紅紫色、内側が淡緑黄色の独特な花を釣鐘状につけます。芽吹きは、いかにもおいしそうな感じで、よくふきのとうや山菜と間違えられて採取され、中毒を起こす事例を聞きます。症状は、腹痛、下痢、血便などで、ひどくなるとけいれんが起ることもあります。

トリカブト…これも早春に芽を出し、秋に紫色で烏帽子型の花をつけます。有名な有毒植物で、地下部分の毒性が特に強いのですが、全草にわたり毒成分を含んでいます。大きくなると採られることはまれですが、春の山菜シーズンには、芽が採られているのをここ船通山でもよく見かけます。症状は、唇のしびれや吐き気が起り、ついで知覚、運動神経麻痺が起ります。重症になると、口から泡を吹き、呼吸麻痺を起こして死にいたることがあります。

ツタウルシ…ツタに良く似たツル性落葉木で、樹木や岩などに寄りかかるようにして気根をだして這い上がり、秋には赤く色づき、目を楽しませてくれますが、

ウルシの仲間ではもっとも毒性が強く注意が必要です。葉は、3枚に分かれるという特徴があり、成木の葉では簡単に見分けがつきますが、若木のときは、ツタの葉も3枚に分かれるものがあるので、そのツル全体を見てすべての葉が3枚かどうかを観察するといいでしょう。また、ツタウルシの枝は木の枝のように突き出すことが多く、ツタはへばりつくようになっているのも特徴のひとつです。さらに、ウルシの仲間は、枝や葉を切ると白い液が出てきます。この液でかぶれるので、注意が必要ですが…。これらのことを頭に入れて見分けてください。ウルシの仲間は、それに触れることでかぶれますので、ウルシだと思ったら触らないのがいいでしょう。かぶれの症状は、人により差がありますが（かぶれない人もいる）顔や首、手などにかゆみの強い紅班を生じます。ほとんどの場合、触ってから1～2日あとに症状が出てきますので、原因がわからないことが多いようです。かぶれを確認したら、専門医の治療を受けましょう。

ヤマウルシ…これもツタウルシと同じようにかぶれ、ここ船通山にも多く見られますので注意しましょう。

ミヤマイラクサ…茎や葉の葉脈にトゲをもち、皮膚に触れると刺さり先端が折れてトゲの中の毒液が注入されます。毒液が入るとヒリヒリとした痛みやむず痒さを感じ、イライラがかなり長く続きます。

テンナンショウ…サトイモ科のなかまで、マムシグサといえれば分かり易いと思いますが、球根や実には有毒成分を含んでいます。まず口にすることはないとはいませんが、注意しましょう。

ハウチャクソウ…ユリ科のなかまでです。茎が上部で分岐するのが特徴で、芽出しがナルコユリやアマドコロによく似ているため間違えて採られることがあるので注意しましょう。

キノコにも注意!

秋になるとキノコ狩りは魅力的ですが、毒キノコが怖いという人は多いと思います。昔から良く言われている毒キノコは色が鮮やかで毒々しく、くきが縦に裂けにくいとか、くきにつばのあるものや臭いの悪いものは毒である、などの区別点は例外がありすぎるので、こうした迷信は信じないことです。昔から食べられているキノコを確認しながらキノコ狩りをするとういでしょう。でも、心配な人は、図鑑で毒キノコの特徴を良く覚えておくとういでしょう。毒キノコは、数が限られているので覚えるのもたやすいと思います。キノコの種類はたくさんありますが、食用となっているキノコは今まで人が食べた結果で食用となっているのです。でも、食用となっているからといって食べ方や、食べる量でも中毒をおこす場合がありますから注意が必要です。はっきりと食用にな

ると確認できたキノコだけを食べるようにしましょう。

特に注意したいキノコは、ツキヨタケ、ウラベニホテイシメジ、ニガクリタケ、クサウラベニタケ、カキシメジ、イッポンシメジ、ハナホウキタケ、テングタケのなかま（テングタケのなかまには毒キノコが多い）などです。

ここ船通山のブナ林の中では、シメジのなかまであるムキタケ、ヒラタケが一番手軽に楽しめるのですが、よく似たものにツキヨタケがあります。

ツキヨタケ（方言名くまひら）は、初期の小型のものが色はシイタケ、形はムキタケやヒラタケに似ています。見分ける最も簡単な方法は、くきを裂いて中央のいしづきの部分に黒いしみがあるかないかを見ます。黒いしみがあったら、形の大小、色の濃淡に関係なくツキヨタケと思って差し支えありません。

ツキヨタケはイルシジンという毒成分をもち、これを食べると激しい吐き気・頭痛・下痢・幻覚症状を起こします。夜、青白く発光しますが、古くなると光りませんからあてにはできません。

また、この地方には、昔からこの猛毒のツキヨタケ（くまひら）を漬物にして食べるところがあると聞いていますが、漬物にしても毒性が無くなったりするわけではありませんので、決して試さないようにして下さい。

テングタケの特徴と、ツキヨタケの特徴は右の写真のとおりです。くれぐれも間違っるとらないようにしましょう。



テングタケ



ツキヨタケ（茎部に黒色部がみられる）

船通山と製鉄文化

登山道に入る前に、この地方の製鉄文化について触れておかなければなりません。みなさんは、「たたら」という言葉を聞いたことがありますか。

この地方の土質は、大部分が花崗岩や火成岩から成り、これらの岩山は長い間に風化されてボロボロに砕けるようになります。このボロボロに砕けた砂を「まさ土」と呼び、これに含まれている良質の砂鉄とこの地方で生産される木炭を原料とした製鉄がこの地方では発達しました。これを「たたら」と呼び、日本の特殊鋼の一大生産地でありました。現在でも、日本で唯一のたたら製鉄がここ奥出雲町で行われ、全国の刀剣師のもとに材料の「玉鋼」が配布されています。

それでは、そのたたらについて、もう少し詳しく述べましょう。まず、砂鉄の採取方法ですが、今のように磁石が無い時代には、このまさ土を切り崩し、それを水で押し流して選別するという方法が取られていました。これは、あらかじめ上流をせき止めておいた谷川に、山腹のまさ土を掘り崩して運び込むことからはじめ、その土砂をせき止めておいた水で押し流し、流れの中で、軽い土砂と重い砂鉄をより分け、だんだん純粋な砂鉄を取り出すという作業で、これを「鉄穴(かな)流し」と呼んでいます。この「鉄穴流し」は、水の条件の良いところはもちろんですが、水のないところでもその作業を行うため、山を巻く様に水路が作られたり、板による樋といで谷を渡ったりされた跡が残っています。亀石コースの中ほどの横手道は、その水路のなごりで、谷の上の方には水を貯めたと思われる石の堰を見ることができます。そして、「鉄穴流し」で流された肥沃な土は、下流で平らにされ、新たな水田となり、農業生産の向上にも役立っていました。

また、大量の木炭を必要としたため、山の単位面積に1つの炭焼き釜を作り、木を切り、炭を焼き、また次のところで釜をつくりというように炭が生産され、たたら操業に使われていました。鳥上滝コースと亀石コースの2つのコースとも、登山道の脇にこの炭焼き釜の跡を多数見ることができます。

こうして採取した砂鉄と生産された木炭を炉の中で燃やし、鋼(「ずく」と呼んでいた)に仕上げますが、この砂鉄を製錬し、鋼を作り出す一連の作業を「たたら(鈔)」というのです。亀石コースでは、駐車場までのところにこのたたら跡が確認されており、鳥上滝コースでもたたらでできるケラと呼ばれる鉄の塊が確認されています。この一帯は、日本でも最も古くからあるたたら^{あめのむらくものつるぎ}の里で、古事記に見られる「天叢雲劍」もこの地で製作されたと伝えられていま

す。また、神話「八岐の大蛇」では、その尾から「天叢雲劍」^{あめのむらくものつるぎ}が出たとされ、この船通山の頂上にはその剣の出頭の地として碑が建立されています。

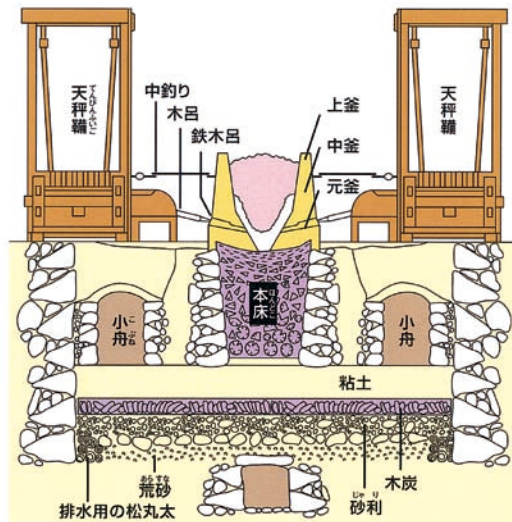
このように、古くから「たたら」とのかかわりが深いこの船通山は、木炭製造で木を伐採、「鉄穴流し」で山の斜面を崩しているため、このあたりの森林も、原生林ではなく、二次的な再生林なのです。



炭焼き風景

鉄穴流し風景図。
下村尚衛門信重著「鉄山記」(幕末ごろ刊行)より

たたら 鉄の地下施設



天秤籠と地下構造の図

鳥上滝コース

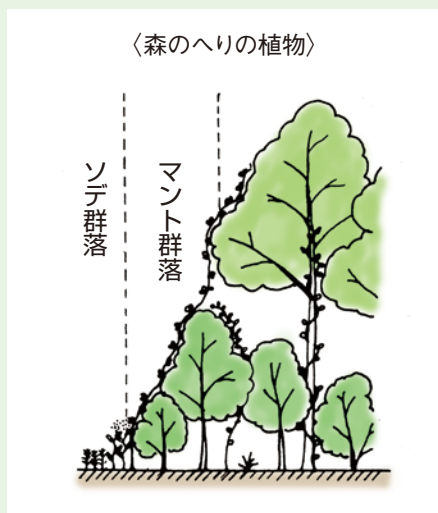
登山口まで

ヴィラ船通山から出発すると、まもなく「わくわくプール」と温泉スタンドがあります。見上げれば民宿の宿が見えます。ここの分岐を右に進めば鳥上滝コースです。この道沿いに流れている川が斐伊川本流で、鳥上滝コースは斐伊川本流沿いに進み、この上流部にある鳥上滝が斐伊川の源とされ、このコースの呼び名にもなっています。

駐車場までは、舗装道路が整備されましたが、早春にはアテツマンサクが良く咲き、春の芽出し、新緑から夏盛りにそして秋の紅葉と、周囲の山々が楽しませてくれますので、時間があればゆっくりと歩いて見たい道です。

ちょっと一休み 森のマント

さて、登山道入口までのところまで、林の縁の部分を見ながら歩きますが、その縁を良く見てみましょう。ヌルデ、タラノキ、ウツギ、キブシなどの低木やツルアジサイ、サルナシなどのつる性植物が繁って森林を被っている姿が見られます。さらにその外側には、イタドリやススキなどの草の仲間が帯状に繁っている姿が見られます。この低木やつる植物の繁っているところをマント群落、草の繁っているところをソデ群落と呼んでいます。



これらはちょうど人間がマントを着て寒さから身を守るように森林の中に直接風が吹き込んだり、日光が直射して乾燥するのを防いだりする大切な働きをもっているのです。ここに繁る植物は、一見したところ荒れはてたイメージを与え、森のじゃま者に思われるため、良く刈り払われることがありますが、マント群落が失われたため森林が破壊された例もありますから、むやみに刈り払わないことが大切です。

駐車場から溪流に沿って

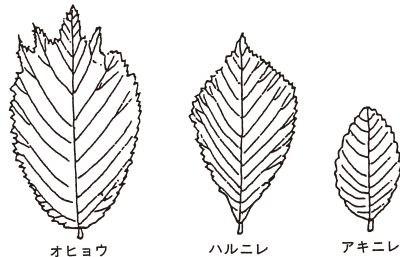
駐車場が登山道の始まりです。ここでは、標高約 700m、入り口にはハクウンボクがあり、初夏には、白い花を咲かせます。また、クマノミズキが目につきます。秋にはノブドウに似た小さな実をたくさんつけ、ツキノワグマのいるところではその餌としてよく食べられています。その名前の由来は、クマとは関係なく熊野地方のミズキという意味です。よく似たミズキは葉が互生（葉が互い違いについている）なのに対し、クマノミズキは対生（葉が両側）に同じところから出ている）なのですぐわかります。ミズキという名は、その名が示すように、“水木”の意で、春にその枝を切ると切り口から樹液がたくさん出るのでこの名がついたと言われています。



クマノミズキ

ハルニレの木を探してみましよう。一般にニレ（ヨーロッパではエルムの並木で有名）と言えばハルニレを指しますが、ニレの間には、アキニレ、オヒョウウなどがあり、葉の形で区別することができます。また、その名のとおり、ハルニレは春に、アキニレは秋に花が咲き実をつけます。5月、ハルニレの新緑を見て歩くと小さな緑色のチョウの幼虫を見つけることができます。

これはカラスシジミの幼虫で、島根県では、三瓶山とここ船通山だけでしか発見されていない珍チョウです。6月から7月にかけてウツギやクリ、リョウブなどの花によく吸蜜にやってきます。また、夕刻には、高い梢の先を数匹のオスがもつれあってなわばり争いをしている光景を観察することができるでしょう。



オヒョウウ

ハルニレ

アキニレ

ニレの仲間の葉

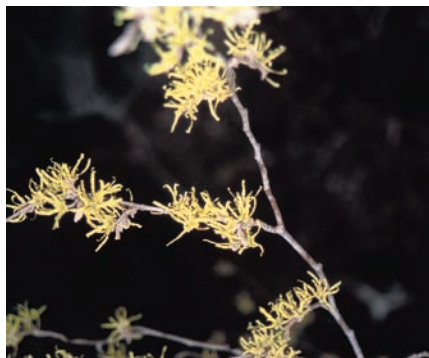
これはカラスシジミの幼虫で、島根県では、三瓶山とここ船通山だけでしか発見されていない珍チョウです。

6月から7月にかけてウツギやクリ、リョウブなどの花によく吸蜜にやってきます。また、夕刻には、高い梢の先を数匹のオスがもつれあってなわばり争いをしている光景を観察することができるでしょう。

駐車場から、少しの間、杉林の中を進みますが、やがて雑木林になり、石畳の道に入ります。ここから溪流に沿ってそのせせらぎを聞きながら進みます。ここからは、溪流独特の植生が始まり、サワグルミ、ホオノキなどの高木と、登山道のまわりに見ることができるハイイヌガヤ、チャボガヤ、タンナサワフタギ、ウリノキ、キブシなどの低木、そして、その中間木のハウチワカエデ、

ナツツバキ、ヤマザクラ、アテツマンサク、クマシデなど、また、ミヤマイラクサ、クサソテツ、リョウメンシダなどの草本が見られるのでよく観察してみましょう。ここ船通山の沢筋は、数多くの深山性の草本を蔵して昼なお暗く、冷涼な雰囲気をかもし出しています。

春早くには、アテツマンサクが咲いているのを見ることができます。花の時期を見て、その葉がどんな形なのか観察してみるのもおもしろいでしょう。このアテツマンサクは、小さな黄色の花をつけますが、方言で「タニイソギ」と言われています。



アテツマンサク

タニイソギというのは、「谷急ぎ」すなわち谷に春の到来を急いで告げ

る花というもので、もう一つには、「他に急ぎ」すなわち山野の草本の中でも一番先に咲くものというものです。しかしながら、遠くから見ると黄色く見える花で、別の花を「タニイソギ」といっているところもあります。それは、ダンコウバイです。どうやら遠くからみると同じように見えるため、違う花を同じ方言で呼んでいるようです。アテツマンサクの花は、細長い5枚の花弁をリボンのようにした風変わりな花です。マンサクという名前も、「先ず咲く」がなまったもの、あるいは、黄色の花が秋の稲の実りを象徴しているように見え、豊年満作という意味だとも言われています。単なるマンサクとの違いは、葉の両側にいつまでも星状の毛が残っていることと、いい香りがする点で、後はほとんど変わりません。マンサクは、美しいウラクロシジミ（チョウ）の食樹で、5月に丸いぼっかりした穴をあけた若葉の近くを丁寧に捜すと、緑色の



ウラクロシジミ

愛らしいワラジ型の幼虫を見つけることができます。

ちなみに、ダンコウバイは、クスノキの仲間と同じころ黄色いちいさな花を散形状にまとまってつけますので、違いを観察するのも良いでしょう。この辺りにも点在しているようですが、少し下流ではたくさん見ることができます。

春の樹の花

アテツマンサクと同じような時期にダンコウバイが咲くことは述べましたが、このダンコウバイは“檀香梅”の意味で、枝を切ると芳香があることから名付けられました。この木は雌雄異株で、花は芳ばしい香りがします。特に雄株には多くの花をつけるので、生け花材料として使われます。葉は先が浅く3つに分かれていますのですぐに見分けられます。

このころキブシが枝先にかんざし状の黄色い花を枝いっぱいにつけて垂れ下がります。花の時期以外でも夏頃であれば垂れ下がった花がそのまま実り、小さな果実が垂れ下がっていますし、秋から冬にかけては、春に花をつけるための花弁を既につけていますので、葉の落ちている時期でも見つけることができます。

このほか、アブラチャンやクロモジもこのころ花をつけます。アブラチャンの名の由来は、種子と樹皮に油が多いことによるらしく、トネリコのなかまとともに山で薪用として昔からよく用いられてきました。

これらは、いずれも花の色が黄色で、早春の樹の花に黄色い花が多いのは非常に不思議な現象です。他にも黄色い花を探してみましょう。また、どんな花の色がどの時期に咲くのかも調べてみればおもしろいでしょう。



クロモジ



キブシ



ダンコウバイ

溪流に生きるゴギ

溪流を横切ると、上方にちょっとした淵があります。水はきれいで冷たく、夏に足を入れると気持ち良く感じます。この溪流の生き物について観察してみましょう。

溪流の最も代表的な魚はゴギです。この地方ではコギといいますが、以下コギとして紹介します。名前については、いろいろな説がありますが、ゴギは石見地方で使われていた地方名で、出雲地方ではコギと呼んでいます。コギとは、ハングル語で「水の肉」を意味する「ムルコギ」が転じたものだと言われ、コギがなまってゴギになったという説があります。

コギは、中国地方の西部のみに住むアメマス（イワナ）の亜種で、頭の先まで白色の虫食い模様があるのが特徴で、夏でも水温が20度を越えず、水のきれいな上流に生息しています。また、コギが暮らす水域は、豊かな広葉樹林が見られる環境の所が多く見受けられることから、コギはここ船通山の豊かな自然のシンボルと考えても良いでしょう。

コギは、人影に敏感ですから繁殖期を除いてコギの遊泳行動はほとんど見かけることはできません。ですから、観察する時には、岩影に身を隠してそっとのぞいてみましょう。コギは大変貪欲で、水生昆虫（トビケラ、カゲロウの幼虫など）を主に、クモ、ハチ、カエル、サワガニ、ミミズ、カタツムリ、小魚などを食べています。コギの名前の由来からも推察できるように古くから山間部においては重要な栄養源であったと思われ、味もおいしいことからカゲロウの幼虫を餌に盛んに釣られました。現在の生息数は激減し、環境省や島根県のレッドデータブックに掲載され、絶滅が心配されています。激減の原因は、河川改修やダムなど複合的な要因が考えられますが、追い討ちをかけるようにコギの生息地にニッコウイワナなどの放流が平然と行われており、雑種化も心配されています。コギは、動物学上でも貴重な魚ですから、「なんでもいからイワナを釣りたい」「釣り人のためにとりあえず手に入るイワナを放流する」といった人間のエゴで、悠久の歳月をかけて亜種というレベルまで分化してきた歴史を踏みにじってはなりません。



ゴギ(コギ)

川の中の昆虫たち

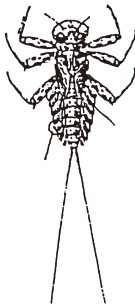
谷川の石を拾い上げて、良く見ると、砂粒をつづりあわせたカメ型のものがくっついています。また水の中に沈んでいる落ち葉を見ると、葉や枝のかけらをつづりあわせたミノムシみたいなものがあることに気付くでしょう。これがトビケラの幼虫の巣なのです。さらにザルか何かを使って岸の草や根が伸びているところや石のくぼみ、石と石の間などを、川の水が流れているところと淀んでいるところに分けて調べてみると、実にいろいろな生き物が見つかります。こうして捕まえたトビケラ、カゲロウ、ドロムシ、トンボ（ヤゴ）などをイチゴのポリパックにいれて観察してみるのもおもしろいでしょう。それぞれの水生昆虫たちの「息つき」の方法、流れの中で流されないための工夫、餌をとるための口の形などいろんなことがわかります。ここには、生きた化石ともいわれているムカシトンボのヤゴも生息しており、石の裏を見て回ると比較的容易に見つけることもできます。

なお、観察が終わったら必ずもとの川の中に戻してやることを忘れないようにしましょう。

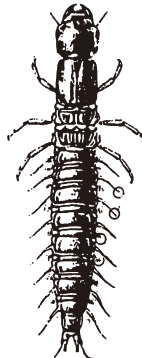
〈水生動物図〉



フタスジモンカゲロウ



エルモンヒラタカゲロウ



ヘビトンボ



シマトビケラ

代表的な水生昆虫

水質と水生生物

これらの水生昆虫を初めとして、ミミズ類、ヒル類、魚類、プラナリヤ、貝類などの水生生物は、その水の環境に大変敏感で、水の汚れによってその生息が大きく影響され、生息地域が異なります。このため、川の中の水生生物の種類構成や個体数を調べることによって、その川の汚染の程度を知ることができます。

環境省では、1985年に水質を、[Ⅰ] きれいな水、[Ⅱ] 少しきれいな水、[Ⅲ] 汚い水、[Ⅳ] 大変汚い水、の4階級に分けて、それぞれの階級の指標生物を計16種選定して、水質を簡便に判定できる方法を提案しています。

船通山の溪流は、どの階級にあたると思いますか。興味があったら調べてみましょう。

水質階級と指標生物の生息範囲

番号	水質階級 指標生物	水質階級			
		Ⅰ きれいな水	Ⅱ 少し汚れた水	Ⅲ 汚い水	Ⅳ 大変汚い水
1	ウズムシ類	■			
2	サワガニ	■			
3	ブユ類	■			
4	カワゲラ類	■			
5	ナガトビケラ・ヤマトビケラ類	■			
6	ヒラタカゲロウ類	■			
7	ヘビトンボ類	■		
8	5以外のトビケラ類	■	■		
9	6、11以外のカゲロウ類	■	■		
10	ヒラタドROMシ	■		
11	サホコカゲロウ		■	
12	ヒル類		■	
13	ミズムシ		■	
14	サカマキガイ			■	■
15	セスジユスリカ			■
16	イトミミズ類			■

■ は、2つの階級の指標となる生物です。

(環境庁水質保全局)

溪流に沿って鳥上滝まで

さわやかな溪流のせせらぎの音を聞きながら、鳥上滝まで、沢を何度か渡りながら斐伊川の源流をさかのぼります。春には鳥のさえずりもにぎやかで、心をなごませてくれます。ミソサザイの華麗な鳴き声や、ヤマガラ、遠くからはツツドリと春の繁殖期には様々な鳴き声が聞こえます。

相変わらず高木のサウグルミ、ホオノキ、ハクウンボク、ヤマザクラなどの高木にタンナサワフタギ、ウリノキ、ハナイカダ、ハウチワカエデなどの中低木、リョウメンシダ、シシウド、キバナアキギリ(方言名ことじそう)、ミヤマカタバミ、クサソテツ、ヤマシャクヤク、ミヤマイラクサ、ノブキ、サンインシロカネソウ、ネコノメソウ、ウワバミソウ、ハシリドコロ、サンヨウブシなどの草本を見つけることができます。

木のすきまのようなところが時々見えますが、これは台風などの強い風や積雪により木が倒れたところ。これらの周囲では、日当たりが良くなるなどの生育環境が変わるため、下草がよく育つようになり、少しずつ植生が変わってきています。登山道の脇に少し平らなところがありますが、これもその中で一つ、サンヨウブシが良く育つようになりました。

サンヨウブシは、県内ではここ船通山と大万木山おおよろぎだけに見られます。山陰地方では、サンイントリカブトが大部分ですが、この両者の区別は非常に難しいものがあります。秋のサンヨウブシの美しい花を見てみると、とても毒草には見えませんが、トリカブトの仲間アコニチンという成分があり、全草有毒です。特に、根に大部分に集中しており、例えばわずか3～4mgで人を死なせてしまうほど強い毒がありますから気をつけて下さい。民間薬の本に、痛み止めによく効くことが書いてありますが、素人が使うことは禁物です。



サンヨウブシ

トリカブトが秋の花の毒草ならば、春に鐘形で外側が暗紅紫色、内側が淡緑黄色の独特な花をつけるハシリドコロは春の花の毒草です。

このハシリドコロも全草有毒で、アルカロイドのスコポリンを含む猛毒成分を含んでいます。しかし、この毒成分もトリカブト同様に素人には大変危険です。なかでも地下茎の毒性が強く、中毒を起こすと幻覚症状を起して走り回って苦しむというところからハシリドコロの名がついています。周囲がまだ枯れ

木立ちといった冬景色が残る早春に、いかにもおいしそうな芽を出します。この若芽がいかにも山菜的であるので、ついつられて採取し、誤食されやすいので注意が必要です。誤食すると、中毒のため幻覚症状を起こし走り回ったり、さらに呼吸まひで死亡することもあり、春の山菜採りの時、最も注意したい毒草です。ここ船通山でも、毎年いくつかの芽を採った跡を見かけますので注意しましょう。



ハシリドコロ

倒木や朽木は、キノコムシ類・ゴミダマシ類・オサムシ類などが生活しています。これらの虫には美しくてかわいらしい虫が少なくありませんが、良く調べるにはオノやナタで朽木を少しずつくずして調べる必要がありますので、無理をしないようにしましょう。時には、ミヤマオビキノコムシやヒメコブヤハズカミキリなどのように山陰では非常に珍しい虫を見つけることができます。

足元をチョコチョコとはいまわる2～4cm くらいの中型の黒い虫がいたら、それがオサムシです。オサムシのなかまは夜行性で、他の昆虫やミミズ・カタツムリなどを食べています。成虫は、朽木や土の中で冬を越します。つかまえるときは、肛門から強い臭いの液を出しますので目に入らないように注意しましょう。オサムシのなかまは、船通山では、クロナガオサムシ、キュウシュウクロナガオサムシ、エゾカタビロオサムシ、オオオサムシ、ヤコンオサムシ、アキオサムシ、マイマイカブリの7種が知られています。マイマイカブリはその名前が示すように、長細い頭と鋭いアゴを持ち、マイマイ(カタツムリ)のからの中に頭を突っ込んでその肉を食べます。オサムシは後翅が退化して空を飛べない種類が多く、地上生活しかできないため多くに種分化を起こしています。

クロナガオサムシは、船通山を含む道後山山塊が本州西限にあたり、ブナ林にのみ生息し、やや湿潤な環境を好みますし、キュウシュウクロナガオサムシは、ブナ帯以下の低山地のやや乾燥した環境に生息しています。

しばらく行くと、狭い登山道に突き出るように大きな木の株がせり出しているのが見えます。この木は、ケヤキという木で、石を抱え込むように根をだしています。自然のたくましさに触れることのできる小さな一コマです。

他に、シナノキ、ヤマハンノキ、アワブキ、ハクウンボクの高木を見ることが

できます。この地方で“やまがき”と呼ぶシナノキは、その樹皮は削りとって繊維をとり縄にしていました。特有の樹形で船通山では一風変わった黄葉を見せてくれます。

ちよつと
 一休み **山菜あれこれ**

春には、山菜の採取を目的に山麓を歩いている方を多く見かけます。この山系にある山菜について少しお話ししましょう。

モミジガサ…この地方では、ショブナとかショボナという名前で呼ばれています。少し癖がありますが、山菜の中では珍重されています。これは、少し湿った感じの雑木林の中に生育しています。採取できるまでに数年かかりますので、絶やさないように注意が必要です。よく似た、オクモミジバハグマという植物がありますが、これはとても苦くて食べることができませんので注意が必要です。



モミジガサ

クサソテツ…別の名をコゴミと言って、あくが無くゆでてすぐ食べることができることから、ここの山系でもよく採られています。胞子のうをつけない栄養葉（補葉）、胞子のうをつける胞子葉（実葉）の二通りの葉をひとつの株からかたまて出しているため栄養葉の方を摘みます。



クサソテツ

最近では、採られ過ぎたせいか、道端のクサソテツの株はめっきり小さくなり、また、少なくなったようです。これは、毎年出る芽を次から次へと採られるため、無くなる原因となっています。

ミヤマイラクサ…危険な植物でも紹介しましたが、それが食べれるの？って思う

方も多くあると思います。葉や莖にあるとげが刺さると痛痒くなりますが、若芽は、天ぷらやおひたしなどにすると、そのとげも気にならなくなり、とてもおいしくいただけます。

シオデ…これは、芽が出たところはアスパラガスそっくりなことで、食感もアスパラガスに良く似ていることから山のアスパラガスとも言われています。芽が出たところを採りますが、枝の先の柔らかいところなら食べることができます。数が少ないのでそっとしておいてほしいものです。また、タチシオデも同様に若芽を食べることができます。

ウバミソウ…この地方では“たきな”といって良く食べられる山菜の一つです。日陰の湿った谷筋に良く育ち、いかにも大蛇（ウバミ）の出そうな雰囲気のところによく見られることからそう名付けられたものでしょう。根元が少し赤みがかっていますが、ゆでると美しい緑色になります。少しぬめりがありますが、煮物、炒め物、漬物等に良く使われます。よく根っこごと抜きさってあるのを見かけますが、根っこが残れば、来年も芽を出しますので残しましょう。良く似た少し小ぶりのヤマトキホコリも同様に食べることができます。これは、小さいことで数が少ないため、あまり知られていませんが、柔らかいので遅くなくても食べることができます。

ヒカゲノミツバ…かけぜりと呼んでいますが、普通に見られます。三杯酢や、すまし汁などに最高です。

ツルアジサイ…ユキノシタの仲間、ツル状で木にからみず。春の若芽を摘んで食べることができます。ツタウルシと間違わないようにしましょう。

コシアブラ…ウコギの仲間、この地方ではバカノキと呼んでいます。少し癖がありますが、その若芽を天ぷらや和え物にするとおいしくいただくことができます。タカノツメも同様です。

ハリギリ…これもウコギの仲間です。コシアブラと同様に食べることができます。

タラノキ…春早くから食材として並びます。ここの山麓に見ることができますが、よくハゼの木の芽が採られているのを見かけます。間違っても採らないようにしましょう。

これらの木の芽は、時期を過ぎると固くなり、おいしくなくなります。また、2番芽を採るとその枝は枯れてしまいますので、2番芽は採らないようにしましょう。

よく間違っても、春の若芽の採られた跡を発見します。採られた植物は、ハシリドコロやトリカブト、そしてハゼの木などです。注意が必要です。また、山菜のあるところでマムシに噛まれたということもありますので、良く注意をして下さい。

主な山菜と料理方法

俗名(方言名)	和名	料理法
しょぶ(ぼ)な	モミジガサ	おひたし・あえもの・三杯酢
こごみ	クサソテツ	にしめ・酢物・汁の実・天ぷら
めら	ミヤマイラクサ	天ぷら・あえもの
しょうで	シオデ	あえもの・汁の実
たきな	ウバミソウ	にしめ・酢物・炒め物・漬物
かけぜり	ヒカゲノミツバ	三杯酢・汁の実
ばかめ	コシアブラ	天ぷら・あえもの
	ハリギリ	天ぷら・あえもの
たらのめ	タラノキ	天ぷら・あえもの・酢味噌
ままこな	ハナイカダ	にしめ・おひたし
やまごぼう	モリアザミ	酢の物・漬物
むかご	ヤマノイモ	にしめ・むかごめし
	ツルアジサイ	天ぷら・あえもの

鳥上滝

溪流に沿ってさらに進みます。植生は変わりませんが、両側はさらに急になってきています。

前方に杉の木が見えてきます。そこが鳥上滝です。斐伊川の源といわれるこの滝、高さは約16m、このコースのハイライトでもあります。滝に向かって左側の大きな石に注目してください。斜め左下に割れたようになっています。今もその面影を少し残していますが、ここに、天然記念物に指定されていた「石割樗(いしわりけやき)」がありました。昭和50年代の後半の雪で枝が折れ、樹盛が弱まり、とうとう枯れてしまいました。大きな幹に見えた向こう側はほとんど空洞で、逆によくここまで持ちこたえたものだ后感心しました。そのありし日の雄姿をその痕跡からうかがい知ることができ



まず。元気だったころは、樹高約 15m、根は約 60 度の角度で玄武岩の節理に沿って下り、高さ 6m、幅と厚さはともに 1.8m の大岩塊を文字通り通り抜けて土の中に入っていました。幹は、目通りの辺りにこぶを持ち、幹周りは 5.5m、根元から 2.8m のところで 4 本に分かれていました。その姿を想像してみてください。

この滝壺には、ハコネサンショウウオ、ヒダサンショウウオが見られます。斐伊川の源流にあたり、「古事記」によれば、この辺一帯を荒し回って、後に須佐之男命（スサノオノミコト）に退治されたという八咫遠呂智（やまたのおろち）<八岐大蛇>はこの滝を寝城にしていたといえます。

サンショウウオのなかま

この辺りの湿った深い落ち葉の下にはサンショウウオの仲間の姿を見ることができます。

サンショウウオというと、オオサンショウウオ（方言名はんぞき）を思い浮かべる人も多いことと思います。大型のものは、体長 1m をはるかに越し、日本産の八虫類・両生類中では最大となります。この特別天然記念物に指定されているオオサンショウウオはここ船通山では極めてまれで、この下流域や、斐伊川の支流に生息しています。ごらんになりたい方は、ヴィラ船通山で見ることができます。これをオオサンショウウオと呼ぶのは、日本には、小柄で 10cm 前後のサンショウウオの種類が 10 数種類（18 種類といわれています。）いるからです。このうち、県内には 5 種、ここ船通山には、ハコネサンショウウオ・ヒダサンショウウオとブチサンショウウオがいます。

ハコネサンショウウオは、体長が 8 ～ 10cm ぐらい、体形はすらっとして背中に黒褐色の縦帯があり、肢の先には流れに流されないように石にしがみつける黒色の鋭い爪をもっています。

ヒダサンショウウオは、体調 15 ～ 17cm で、全身が褐色で腹側には斑紋がなく、背側に不規則な形の橙黄色斑紋があり、尾は棒状で目は大きく頭部から盛り上がっています。

ブチサンショウウオは、やや青味を帯びた黒褐色の体に白色の斑紋があるのが特徴です。産卵は、4 月ごろ行い、細長い円筒型の透明な卵のうを石の下の角に産み付けます。新緑の時期に沢筋の水溜りをよく見ると、エラをひらひらさせながら泳ぐかわいらしい幼生も観察することができます。ブチサンショウウオは、亀石コースでよく見ることができます。

オオサンショウウオを除く、他のサンショウウオは幼生時期（1 ～ 2 年間は）

水中で生活しており、成体（親）になれば、陸に上がり落ち葉の下や間で生活しています。



ブチサンショウウオ



ヒダサンショウウオ



ハコネサンショウウオ

鳥上滝から水場まで

鳥上滝を後にすると、鉄の手すりがついた急な階段をあがります。濡れているとよくすべりますので注意しましょう。

階段を上ると小さくなった流れに沿って登りますが、イタヤカエデ、ナツツバキ、ムラサキマユミ、クロモジなどが目に入ってくるようになります。

しばらく行ったところにホンバノウリハダカエデの大木がありました。この木は、ウリハダカエデの狭葉品種で、こことあと三瓶山に一本知られるのみの珍しい木でした。故丸山巖先生が発見されたもので、学名をアーケル・ルホネルベ・ホルマ・アングスチホルリウム・キタムラといいます。少しややこしいですが、学名は万国共通で、世界中どこでも通用する名前であり、便利につくられています。アーケルはカエデ類の属名、ルホネルベがウリハダカエデの種名、アングスチホルリウムが型名（品種名）、キタムラが学名の命名者の名前です。葉がウリハダカエデに比較して、幅が狭く長いのが特徴です。台風で倒れてしまいましたが、この近くに、子孫を残しているのではと考えています。落ち葉を比較してみたいはいかがでしょうか。

谷と分かれて中腹の道へと進みます。ここからは谷を下に見ながら進みますが、登山道沿いの植生が変わってきたのに気が付きます。ここから、高木にブナが見られるようになるとともに、ミズナラが出現してきます。また、ハクウンボク、ナツツバキ、クロモジ、ムシカリ（オオカメノキ）、ムラサキマユミ等を見ることができます。また、シダ類がはびこっていた下草は、ササがはびこってくるようになるとともに、ツルシキミやエゾズリハの低木やヤマジノホトトギス、チゴユリ、オオカニコウモリといった草本が見られるようになり、ブナ林の特徴を見せてきます。

植物の葉や花には、たくさんの種類の昆虫が生活しています。ナナフシ類やカメムシ、ヨコバイ、アワフキ等の半翅目の仲間、あのにぎやかなセミも同じ

半翅目に属します。また、ハムシ、ゾウムシ、カミキリムシなどの鞘翅目、これらの昆虫を食べたり寄生したりする昆虫、ゆりかごをつくるオトシブミなどの興味ある昆虫が見られます。いずれも体長 1cm 以下の小さな昆虫が多く、なかなか目に触れにくいのですが、ここでは、その中でも興味深いヒメハナカミキリの仲間を紹介しましょう。

カミキリムシというと、夜、灯りに飛んできたり、マキに集まっているのをみなさんよくご存知と思いますが、5～6月頃、カエデ類、サワフタギ類、ウツギ類、アジサイ類など花にもよく集まります。なかでも、白っぽくて小さな花をたくさんつける種類が好まれるようで、森の中の木漏れ日の射すようなところの花には、特に多くのヒメハナカミキリを見ることができます。これは、羽化後、成熟するため花粉を食べるからといわれています。体長はいずれも数ミリメートル前後と大変小さく、よく似た種類が多いのですが、大～中型のカミキリムシの少ない船通山においては、個体数の多いこのグループがカミキリムシ相を特徴づけているといえるでしょう。



セスジヒメハナカミキリ

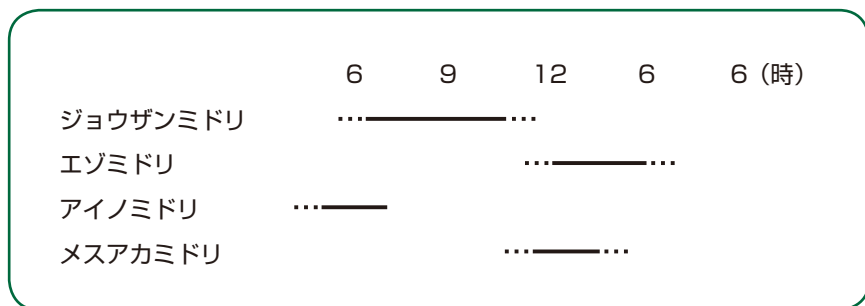


チャイロヒメハナカミキリ

ここで、「船通山のチョウ」について勉強しましょう。船通山は植生に富んでいますから、多種多様のチョウ（約 90 種）が生息しています。ここまでの道すがらいくつぐらいのチョウを目撃できたでしょうか。森の中をよく飛び回っているのはヒメキマダラヒガゲ、ヤマキマダラヒガゲ、クロヒガゲなどのジャノメチョウの仲間ぐらいです。おそらく、「意外に少なかった」という印象が強いのではないかと思います。実は、本当にたくさんのチョウが生活しているのは森の中ではなくて、林縁部のマント群落なのです。

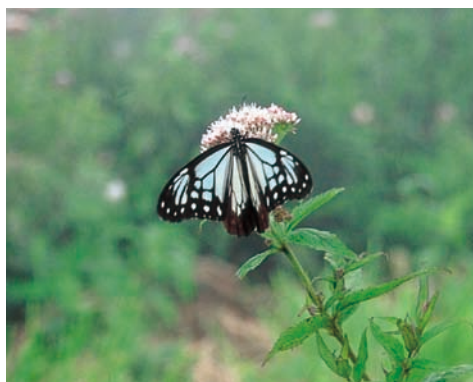
チョウは太陽の日差しが大好きですから、うす暗い森の中では生活できませんが、森の中に陽が射し込むちょっとした空間（日溜まり）があれば、そこが絶好の観察のポイントになります。6～7月頃、梢の先で日光浴をしている

メスアカミドリシジミは、他の固体が近づくと追いかけてこれを追い払い、またもとの位置にとまります。これは自分のなわばりを守るため、メスとの出会いを獲得しようとする意味があると考えられます。メスアカミドリシジミの他、ジョウザンミドリシジミ、アイノミドリシジミ、エゾミドリシジミなどは森の宝石に例えられる美しいチョウで、これらのミドリシジミの仲間こそが、船通山のブナーミズナラ林を代表するチョウといえます。ぜひ、皆さんに、この美しいチョウを観察してほしいものです。ミドリシジミ類は、それぞれ活動時間が異なっており、時間的な棲み分け現象を見ることもできます。



このほか、優雅に舞うアサギマダラも見ることができます。特に、夏、頂上に咲くヨツバヒヨドリの花に吸蜜のため多く群がりヒラリヒラリと舞う姿は華麗です。

滝コースの水場はここが最後です。ここで水を補給して登りましょう。



ヨツバヒヨドリを吸蜜するアサギマダラ



アイノミドリシジミ



メスアカミドリシジミ

黄葉と紅葉

イタヤカエデ、クロモジなどは、秋になって葉の活動が止まると、春や夏に多量に作られた葉緑素が減り、黄色のカロチノイドの色で黄葉がおこります。また、ヤマザクラ、ウリハダカエデなどでは寒さで葉の中の糖が閉じ込められアントシアンが作られ紅葉します。そして、クリやミズナラなどでは、アントシアンに似たフロバフェンという色素によって赤褐色になります。

葉が色づく仕組みはいろいろですが、山歩きをした時、どの植物がどんな色に色づくか観察してみましょう。そして、次の植物に色を塗ってみましょう。



ウリハダカエデ



オオイタヤメイゲツ



イタヤカエデ



ハウチワカエデ



カエデの実



チドリノキ



イロハモミジ



ウリカエデ

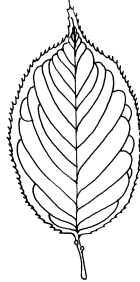


コミネカエデ

カエデのいろいろ



ヤマウルシ



ヤマザクラ



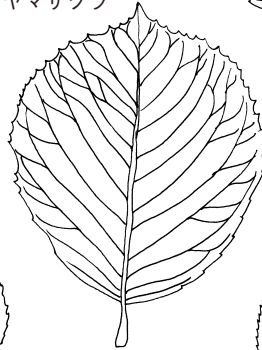
コシアブラ



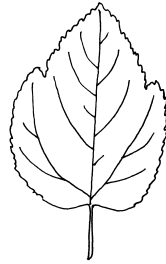
ヤマアジサイ



クロモジ



ハクウンボウ



ヤマグワ



ヤマボウシ



カツラ



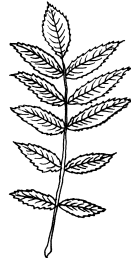
リョウブ



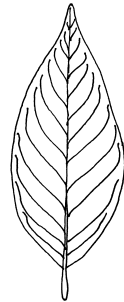
ブナ



ゴマギ



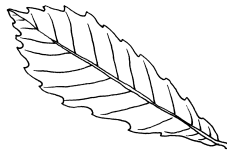
ナナカマド



タムシバ



ナツツバキ



ミズナラ



ケヤキ



コアジサイ

雑木林で見られる落葉

水場から尾根まで

水場を過ぎると、急な登りになり、土がクロボクに変わり、雨の日などにはよくすべるようになりますので、足元に注意が必要です。徐々に見上げるほどの高い樹がなくなり、中間木、低木となってきます。クロモジ、ムシカリ、ツノハシバミ、リョウブ、ナツツバキ、コシアブラ、ハリギリ、コアジサイなどが目につきます。今まで高かった樹と、中間木が同じような高さで混じりあい、また、低木類が樹の勢いを増してきます。これは、頂上に近い尾根では、冬の風雪が強くて高くなれないのと、中低木は、逆に日当たりがよくなってよく育つためです。この辺りは秋には見事な黄葉となります。

左の低木にツルが巻きついています。ヤマブドウです。葉は大きく、裏は赤褐色のクモ毛におおわれています。秋にはよく目立つ紅葉となりますので、その変化を楽しんで下さい。

ここで、クロモジについて説明しましょう。クロモジは、北海道から中国地方まで分布している落葉低木で、4月頃黄色の小さな花をつけます。この木の

肌をよく見てみましょう。どこかで見たことがあるとお思いの方も多数いらっしゃると思います。そうです、生菓子などについている皮付きの楊枝を思い浮かべる方もあるでしょう。クロモジの材には特有の油が含まれており、芳香があるので、楊枝の材料として有



コアジサイ

名な木です。香りをかいで思い出した人もあるでしょう。昔は、この油を灯油や香水に利用していました。最近でも、漢方薬ブームにのり、薬用植物として大変重宝がられています。クロモジの名前は、樹皮上の黒色の斑紋を文字になぞらえてつけられたものといわれています。

同じように見事な黄葉をするコアジサイは、庭に植えられているガクアジサイと同じなかまで、6月頃ガクアジサイを小型にしたような紫色の花をつけます。アジサイと呼ばれる仲間には、他にヤマアジサイがありますが、コアジサイにはヤマアジサイ、ガクアジサイと違って、飾り花がありませんので、簡単に区別できます。

少し穏やかな登りになり、振り返れば横田の町も一望できるようになります。ここあたりからは、尾根の風が心地よく感じられます。

尾根に近くなることから、カタクリを転々と見ることができるようになり、ソゴ、ヤマツツジ、ダイセンミツバツツジ、アセビ、アカモノ、タニウツギ、ホツツジなどが灌木状に繁っています。

アセビは、「馬酔木」と漢字をあてますが、その名のとおり有毒です。放牧地などでは、馬や牛がこの木を食べないので、丈の低いササ原に点々とアセビの繁みが残っているのを見かけます。アセビの花はスズランに似ていて春に咲きます。

はじめ、真っ白い花は、終わりの頃になるとピンクがかってきます。また、株によってははじめからピンクがかった花をつけるものもあります。盆栽や庭木としてもよく利用されます。

アカモノは、ツツジ科に属する常緑の小低木で、亜高山の尾根筋によく見られます。花は小さい鐘状で薄桃色に見え、とても可憐です。アカモノの名は、果実が赤熟して食べられるので、アカモノの転訛だといわれています。



アセビ



アカモノ

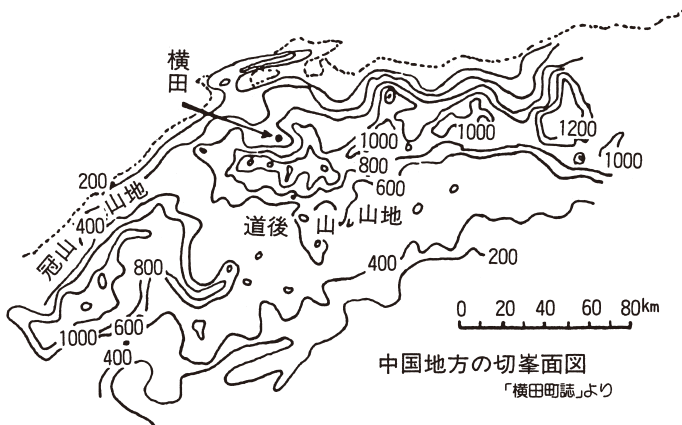
船通山の地形

山歩きをよくする人は、吾妻山や道後山など、近くの間々の頂がみな同じように緩く平らで、山腹が急なことに気づかれたと思います。少し難しいのですが、船通山を取り巻く地形・地質を勉強して船通山の生い立ちを探ってみましょう。

船通山、道後山、吾妻山、比婆山などを備北山群とよんでいます。備北山群のいずれの間々も山頂部が1,000m～1,200m前後とそろっているのは、もともと、この一帯が広い高原台地であったものが、浸食によって削りとられたことを意味していると考えられます。

島根県東部の地図をよく見ると、1,000m～1,200m前後の山頂部一帯(これを地形学上、高位面とよんでいます。)、横田地方をはじめとした400m～600mの緩やかな平面地形(これを中位面といいます。)、斐伊川河口から日本海沿岸部の100m以下の低い地形(これを低位面といいます。)の3つの平坦地が中国山地から日本海に向かって階段状に並んでいます。おそらく、ある時代に一つの平坦地が流水の浸食作用でどんどん削られ、深い谷も広がって山も低くなっていき、浸食作用がさらに進んで全体が極めてなだらかな準平原になっていったものと思われる。しかし、日本のような変動帯では、準平原化するまでに地殻変動が起り、200m～300mの起伏を残したまま次の浸食が始まり、そのためところどころに平坦面が残されたのではないのでしょうか。そのためには何十万年もかかったことと思われる。

船通山に残る高位面の生い立ちは、中国地方の生い立ちを知る意味でも大きな鍵を握っており、現在いろいろな研究が進められています。



尾根から鞍部まで

ちょっとした芝原に出ます。尾根です。ぐるりと見回すと、近くには大きな木は見当たらず、低木が多いのに気がつきます。アカマツやイチイが見えると思いますが、これも大きくなれず毎年風雪に耐えて生育しています。ダイセンヤナギやクロモジ、タニウツギ、アキグミ、ハイイヌツゲ、アセビ、ホツツジ、レンゲツツジなどの低木が多くなります。草本では、カタクリが良く見えるようになり、これから頂上まで続きます。また、秋には白いウメバチソウが私たちの目を楽しませてくれます。このほか、アキノキリンソウもみることができ、ここには、いわゆる高山植物はありませんが、気温や日照から花は大きく鮮やかです。

少し離れたところの尾根筋に、ブナ林に混じって点々と大きなスギの木をみることができます。このあたりに見られるスギは、天然のスギで、本州の日本海側の多雪地帯に自生する独特のスギです。アシウスギとかウラスギとか呼ばれており、スギの変種としてとり扱われています。三瓶で発見された埋もれスギもこれと同じ種類ですが、三瓶山のものほど群生していません。

このスギの特徴は、幹の下から大枝を出すことが多く、下枝は雪に押されて地につき、そこから根を出して独立します。ですから、大小さまざまなおスギが斜面に列状に見られるわけです。このように、植物はその環境にうまく適応して生育しているのです。

よく知られている京都の北山のダイスギは、アシウスギの南限のものを利用したもので、幹を切ると下からよく枝を出す性質を利用して人工的に作られています。北山の磨丸太は、数奇屋造りの建築材として有名で、以前は大量に生産されていましたが、今ではほとんど作られておらず、不要になったダイスギは庭木として植えられています。

ここからしばらくかん木の中を進みます。ダイセンヤナギ、カマツカ、ナナカマド、ウリハダカエデ、ダイセンミツバツツジ、リョウブ、タニウツギなどに混じってヤマウルシが



アシウスギ

ありますので、かぶれないように注意しましょう。また、春は、登山道の両側にカタクリが繁茂していますので、踏まないように注意して歩いてください。また、近年ササユリが増えてきました。花は、独特の香りを放ち、存在感を示しています。

鞍部は、広くなっていますが、ここも春にはカタクリが群生しますので注意深く歩くようにしましょう。

鞍部から頂上へ

亀石コースとも合流し、いよいよあと少しとなりました。

引き続きダイセンヤナギにリョウブ、タニウツギ、ナナカマド、ウリハダカエデ、カマツカ、コマユミ、ヤマウルシなどの中を進みます。かん木が切れると、50mほどの急な登りになります。

このあたりになると、木々が小さくなり、ホツツジ類の低木とササになります。心地よい風がさっと吹き、これまでの汗を吹き飛ばすような爽快な気分になります。ここにもカタクリやササユリ、タニウツギ、リョウブの花やナナカマドの実、そして紅葉と、四季おりおりの楽しみがあります。あと少しと急ぎたいのはわかりますが、尾根筋の植物も観察しましょう。足元には、エンレイソウ、ツクバネソウの姿もみえるはずです。

頂上

さあいよいよ頂上です。山頂には、日南町、横田町の両町観光協会が建てたあめのむらくものつるぎ天叢乃劍出顕之地、の記念碑と、「日本書紀」に「出雲国の肥河上なる鳥髪の地上に天界から須佐之男命が降り立った」という伝説があることから、関係する神職会が建立した須佐之男命を祀った祠があります。山頂からの眺望は格別で、特に空気が澄んだ晴れの日には、360°に広がるパノラマを楽しむことができます。

東の大山山頂から弓ヶ浜半島、そして島根半島、中海、宍道湖、その西の大社の海岸から三瓶山、と国引きの神話そのものが一望できます。視界がよければ、はるか隠岐の島々も見る事が出来ます。さらに、猿政山、吾妻山、比婆山、烏帽子山、道後山から蒜山と、中国山脈を一望することができます。この広大な自然の大きさを改めて感じ、その中で生活している一人なのだということを感じます。また、俗世間のことを忘れさせてくれる一瞬でもあります。

ここから、鳥取県側に100mほど下ったところに天然記念物「イチイの大木」がありますので、時間があれば見ておくのもよいでしょう。

山頂には、カタクリ、ヨツバヒヨドリ、カワラナデシコ、ヒメハギなどの草本と草原を囲むようにチュウゴクザサ、ホツツジ、ダイセンヤナギなどが取り囲み、その下にブナやミズナラ、イタヤカエデ、ヤマザクラなどを見ることができます。春の芽吹きの際にはその芽吹きの色でその樹種を知ることができ、柔らかな芽吹きの色から夏の旺盛な緑、そして、秋の紅葉と、その季節ならではの自然の移り変わりを見せてくれます。



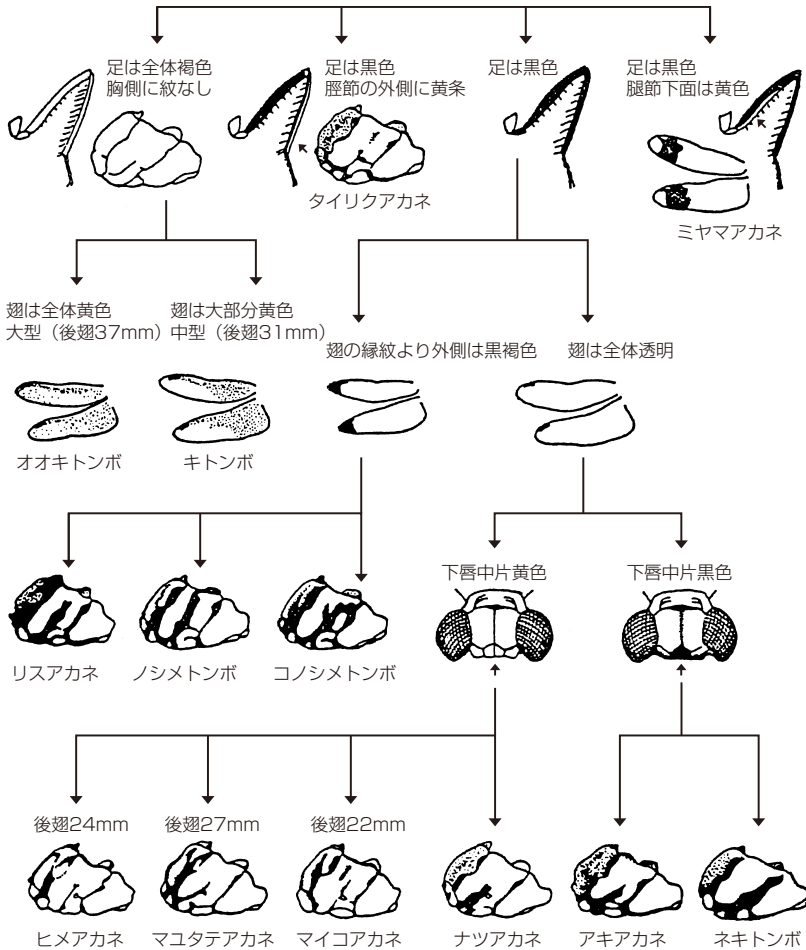
赤トンボの大群

尾根へ出てから、無数の赤トンボが目につくようになります。ここ頂上では、晩夏、頂上立って、夕日をバックに飛び交う数万匹とも思える赤トンボの大群の眺めは圧巻です。

赤トンボの種類は、県内に20種類いますが、この大群はほとんどがアキアカネという種類です。しかも赤トンボというのにお腹はまだ未熟で赤くなく、黄色っぽいことに気づきます。このトンボは、羽化して成熟するまで数ヶ月間を遠く離れた土地で過ごし、成熟した秋には再び羽化した場所に帰ってくるというおもしろい習性があります。6月に麓の水田で羽化を始めたアキアカネは、山頂で夏を過ごし、えさを充分とって成熟し、腹部も赤くなって、10月に入ってから山を下るのです。秋、麓で多数のオスメスが帯状になって飛ぶのは、案外、船通山から下ってきたものかもしれませんね。どなたか、山頂のアキアカネの大群にマークをつけてどこまで飛んでいくのか調べてみてはどうでしょうか。なお、この辺りで見つかる主な赤トンボのなかまの見分け方を示しておきます。胸部の模様をよく見比べてみて下さい。

アカトンボの見分け方

日本昆虫生態図鑑(Ⅱ) 保育社より



カタクリの知恵

ここ船通山の代表的な春の花、カタクリについて勉強しましょう。

ここ船通山では、4月中旬から5月上旬に可憐な薄紫の花を咲かしてくれるカタクリ、この花のたよりは平地では3月下旬から4月初めにかけて聞かれます。まだ他の植物が芽を出したばかりなのに、このような小さなカタクリが花を咲かせます。なぜこんな時期にと思いますが、その理由についてみてみましょう。

カタクリは、ユリ科の仲間で花を咲かせる株は土中深くに鱗茎をもっています。そして、花を咲かせるのにおよそ7～8年をかけてやっと咲かせることができるのです。それでは、種からその生育の過程を見てみましょう。

種は、1つの花から数十個できるのですが、種の先にエライオソームという物質をもっていて、そのままでは芽が出ないようにになっています。では、どのようにして芽を出すかというと、アリの力を借りているのです。エライオソームは、アリのサナギの匂いに似ているため、アリがこれを巣の中に運び、エライオソームの部分を取り除き芽を出すことができるようになるというわけです。こうして、運良く土の中に運び込まれてエライオソームをとられたものだけが芽を出すのです。ですから、1つの花からできた種がすべて芽を出すとは限らないのです。

こうして芽を出すと、毎年1枚の小さな葉をだんだん大きくしながら広げ、鱗茎を発達させるのですが、古い鱗茎の下に新しい鱗茎を作りますので、少しずつ土の奥深くに入り込みます。そして、7～8年たって成熟すると2枚の葉を出し、花を咲かせます。花は、天気の良い日でないと開きませんので、天気の良い日の朝開き、夕方にはしぼみます。そして、次の天気の良い日をまつので、曇りや雨の日には花は開きません。開いているように見えるのは、すでに



カタクリ

花の時期を終わったものが色あせて開いたように見えるのです。こうして花がそり返っているのも、春のわずかな時間に、虫が蜜ツボに確実に入り、受粉をするためです。

おしべを見てみましょう。長さの違う6本のおしべがあります。実は、短い3本が先に出て、長い3本は遅れて伸びてくるのです。これも、天気の良い日に長く咲くための工夫だといえます。そして、花が終わると次の年はまた1枚の葉に戻り、鱗茎に十分な養分を蓄え、また花を開くということを繰り返します。カタクリの葉は、他の植物が繁り始める頃には枯れてなくなります。短い春の日ざしを精一杯利用するカタクリは、生きるために自然から知恵を授かっているように思えます。

このように、芽吹き前の広葉樹林に成育し、他の植物が繁る前に地上から姿を消してしまうような植物を、早春季植物とか春植物（スプリング・エフェメラル）と呼んでいます。ちなみに、カタクリの鱗茎から採ったでん粉が真正の片栗粉です。



カタクリの成長

亀石コース

登山口まで

滝コースとの分岐を左に進めば亀石コースです。この道沿いの川は、赤川といい、この赤川沿いに亀石コースは進みます。

最初に亀石という地名について触れておきましょう。皆さんもよくご存知の神話「ヤマタノオロチ退治」で、スサノオノミコトが酒を飲ませて退治したとありますが、その酒をかもした石甕いしがめがあった所といわれ、「亀(甕)石谷」と呼ばれています。また、この赤川は、古事記に「川の水は血で真っ赤に染まった」とかかかれているように、オロチを退治したときに川がオロチの血で真っ赤になったので「赤川」と呼ばれるようになったといわれています。このようにこの船通山は、神話にまつわる伝説などが地名にも現れており、併せてみてみればおもしろいと思います。

分岐から赤川沿いに整備された道を進むと再び赤川を渡ります。ここから国有林がはじまり、整備された森林の中を行きますが、橋から100mほどゆくと、右手に亀石たたら跡があります。ここ船通山は「たたら製鉄」と大きなかわりをもっている山で、歴史の跡を感じさせてくれます。さらに進むと、駐車場につきます。ここから歩を進めることとしましょう。

駐車場から溪流に沿って

駐車場から100mばかりの間には、オニグルミ、クマノミズキ、クマシデ、ヤマザクラ等が道沿いに続き、ゴマギ、キブシ、ミヤマハハソ等の低木が見られます。それらにまつわるように、アケビ、サルナシやマツブサのつる性の植物がまきついてあります。ここは、森林のふちによく見られる植生といえます。足元をみると、ラショウモンカズラ、サンヨウブシや小さなエンゴサク、オカタツナミソウ等が目を楽ませてくれます。また、ヤマシャクヤクも森の中にひっそりと咲きます。変わった葉っぱの形のオヒョウやダンコウバイもありますので、探して見ましょう。

ここから少し植林の中を行きますが、ナツトウダイやルイヨウボタン、タチシオデ、エンレイソウ、ツクバネソウ、ミヤマカタバミなどを見ることが出来ます。日のあたるところや、日陰のところと変化を見せています。また、この植林帯では、間伐や除伐等が行われると、少しずつ植生が変化していきますので、永い年月を通して観察してみればおもしろいでしょう。

植林帯を抜けると、春にはハシリドコロが群れをなし私たちを自然林の中へと向かえてくれます。溪流のせせらぎと、さわやかな風、ほどよい木漏れ日と鳥たちのささやきが心地よい気持ちにさせてくれます。五感を十分に活用し、自然を満喫しましょう。しばらくは、沢沿いの道が続きます。この溪流沿いにはサワグルミ、ホオノキ、ハクウンボクを中心とした高木と、ナツツバキやハウチワカエデ等の少し低い木、ハイイヌガヤ、チャボガヤ、タンナサワフタギ、ウリノキなどの低木、そしてリョウメンシダやカンスゲが地面を覆うようにしている様子が続き、足元には、エンレイソウ、ネコノメソウ、チャルメルソウ、クルマバソウ、サンインスミレサイシンなどがあります。斜面を見上げれば、ミズナラ、タムシバ、ヤマザクラ等が見られます。ここ船通山の沢筋は、滝コースと同様に数多くの深山性の草本を蔵して昼なお暗く、冷涼な雰囲気をかもし出しています。

谷あいには、堆積土と水にめぐまれていますので、植物がよく育ち、高木のサワグルミ、トチノキ、ミズキ類はとくに水辺を好みます。低木では、ヤブデマリ、ウリノキが多く、樹間には、サルナシやツルアジサイがからみ、草本ではリョウメンシダやウババミソウがよく繁っています。特にサワグルミは、谷川をはさんでのびのびとした美しい姿を見せ、さわやかな葉音をたてています。

サワグルミ（方言名こうだ）は谷あいの代表的な樹種ですが、崖崩れ、洪水などの不安定な状態にある土地に良く見られます。（渓谷の中でも安定した土地にはウラジロガシが林を形成します。）くるみと名のつく木は、このサワグルミのほかにも、オニグルミ、ノグルミなどがあり、芽を見ただけではなかなか見分けることが難しいのですが、大きな実をつけるオニグルミ（方言名でごろび）は、駐車場から少し歩いたところにありますので、比較してみましょう。サワグルミの樹皮は、染料・薬用に使われます。

また、右手に炭焼き釜の跡がありますが、このような釜跡を



サワグルミ(クルミ科)



オニグルミ(クルミ科)

この登山道沿いに点々と見ることが出来ます。これは、「たたら製鉄」に欠くことのできない炭を生産していたもので、一つの釜で炭を焼く面積をおおむね決め、それぞれのところで釜を作り効率のよい炭作りをしていたものです。

少し行くと最初の木橋がありますが、このあたりから春に花を咲かせるサンインシロカネソウが見られるようになります。



サンインシロカネソウ

ちよつと
一休み

ハイヌガヤとチャボガヤ

この登山道ほぼ全線において、常緑の低木が目につきます。その中で、一見まったく同じように見えて、実は違うものがあります。それがハイヌガヤとチャボガヤです。ハイヌガヤは、この辺りでは「ヘンダー」と呼ばれ、その木の性質を利用して、牛の鼻輪や輪かんじきの材料などに使われていました。両方とも同じような性質を持つので、両方とも「ヘンダー」と呼ばれていたのかも分かりませんが…。

常緑樹のハイヌガヤは、イヌガヤの変種で、多雪地の環境に適応した匍匐（ほふく）型の樹形をしているため“這う”という意味のハイが付けられたものです。イヌガヤは、高さ5mぐらいいなり、岩手県南部から南は四国、九州まで生育していますが、ハイヌガヤは2m程度にしかならず、北海道南西部から本州の主に日本海側、そして四国の一部にも生育しています。



ハイヌガヤ

この生育地でも解るように、雪の多い地方に適合するように低くなり、匍匐（ほふく）型に変化した

ものと考えられます。ではなぜ、そうなったのでしょうか。それは、冬どのように過ごすかということを考えれば解ります。雪の中は普通寒いと考えられますが、雪に覆われた地表部は以外に暖かく、凍ることなく温度が保たれています。このため雪の重みで地面につ



チャボガヤ

き、雪の下で、寒風から守られてこのような落葉樹の中でも生育できる性質を身に付けたのです。樹形も直立せず、その下部は地面を這い、根を出してあたり一面に広がり、先端は斜上しています。

チャボガヤは、カヤの変種とされています。これも同じく積雪地帯に多く、やはり同じような経過をたどり似たような樹形となり、同じ環境に適合したものとされます。

一見同じように見えるこの二つの低木は混生していますが、注意深く見れば、その違いに気づくと思います。まず、枝の色の違いがわかります。ハイイヌガヤは葉と同じような色をしているのですが、チャボガヤは茶色の色をしています。それでは、素手で触ってみましょう。少し硬めで葉先がとがって痛く感じるのがチャボガヤで、柔らかく感じるのがハイイヌガヤです。よく見ると、葉の長さにも違いがあり、少し長いのがハイイヌガヤだとわかるはずですが。そう、ハイイヌガヤはハイイヌガヤ科、チャボガヤはイチイ科にそれぞれ属し、その特徴を良く表しています。葉の光沢も違いますが、他の違う特徴も探して見ましょう。

土壌動物

ここで、森を形成するのに不可欠な小さな動物たちを紹介しておきましょう。その小さな動物たちは、そこらの落ち葉や朽木、そして土の中にいます。それでは付近の落ち葉を上から丁寧にめくって、土の中を観察して見ましょう。

まず、一番上は落ちたばかりの乾いた葉が一面に散っています。どの葉もまだほとんど完全な葉の形をしています。新しい葉を取り去ると真っ黒い色をし

た木の葉があります。この黒くなった葉は湿っていて柔らかく、しかも所々はもう腐りかけて少し形が崩れかけています。

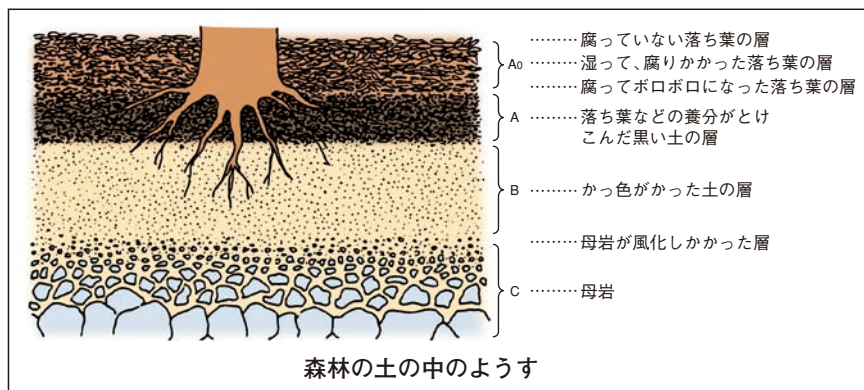
葉には、白や橙色の小さな虫がたくさん動いています。さらに葉をどけてもう少し下の方を観察してみましょう。腐り方がもっとひどくなり、葉はボロボロになっていて、もう何の葉だかわかりません。

その下には黒い粒の土が顔をのぞかせています。掘りつづけると黒土はさらに細くなり、ついにはごろごろした石の層がでてきます。

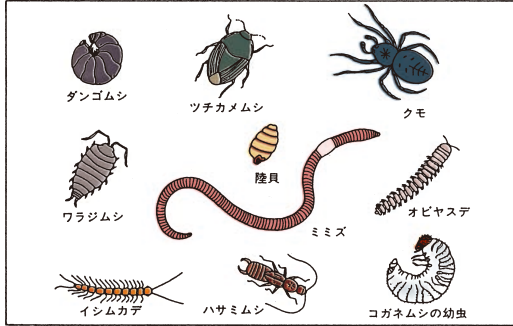
毎年毎年たくさんの葉が落ちてきても、古い葉からどんどん腐って土に溶け込んでいってしまうので、決して、森は落ち葉で埋まるようなことはありません。

小さな虫たちの正体を探ってみることにしましょう。ミミズ、ワラジムシ、ザトウムシ、ヤスデ、ハサミムシ、アリなどは目につきますが、トビムシ、ササラダニを見るにはルーペが必要です。このように、肉眼で見える虫はほんのわずかで、もっと小さな虫たちが、今、私たちが踏みしめている落ち葉の下には生活しているのです。さらに、線虫類・アメーバ類を数えると、わずか1cm²の土にいる微生物の数は1億匹以上といわれています。

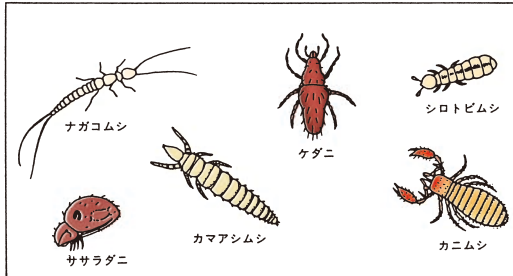
このようにたくさんの虫によって、落ち葉は分解され、栄養分にもどって雨とともに土に溶け込み、再び植物の根から吸収され、植物のからだの一部になります。また、土の中や表面には、落ち葉を食べる虫の他に、これらを捕え食べている肉食のカニムシ、ムカデ、クモもいます。さらにこれを食べるモグラや小鳥たち、その糞を食べる虫や微生物など、森の生物はお互いうまく働いてバランスをとって生長しているのです。



●主な土壌大型動物



●主な土壌小形節足動物



溪流沿いを奥深く

登山道を進みます。2つ目の木橋を渡ると右手にケヤキが見えます。滝のコースでは、岩盤の中に根を張るような大きなケヤキを見ることができます。亀石コースでは、岩に根を張るような木を見ることはありませんが、土質は礫混じりでガラガラしています。しばらくすると、トチノキがあります。沢沿いの林を形成する木ですが、ここ船通山の登山道沿いでは唯一のトチノキです。春遅く、ローソクのような花を咲かせ、秋には実をつけます。葉はホオノキに似ていますが、鋸歯がありますのでよくわかります。実は、アクを抜き、トチモチの原料になります。冬芽は、ベトベトしていますので、冬でも一見して見分けることができます。

まっすぐ伸びた高い木にぶらさがっているようなツル性の植物があります。これは、サルナシと言い雌雄別株で、雌株には秋に香りの良い小さな美味しい実をつけます。

3つ目の木橋のところにかつらの木があります。葉が周辺のものとは違って丸みを帯びていますのでよく分かります。ヴィラ船通山の下流(旧道部の橋のたもと)から見上げると、山の中腹に、天然記念物に指定されている大きなカツ

ラの木がありますので、見て見ると良いでしょう。低木では、タンナサワフタギやウリノキがあります。ウリノキは、葉がウリに似ていることによります。

ここを過ぎてから、山の斜面に目をやりますと、リョウメンシダが一面を覆い、うっそうとした樹林帯の雰囲気をかもし出します。その中に混じって、クサソテツが点々と姿を見せています。また、ヤグルマソウも渓流沿いにあり、地表を覆っています。登山道の脇には、ミズタバコ、山菜としてよく食べられるウワバミソウが多く見られます。そして、ウワバミソウとよく似たヤマトキホコリ（ウワバミソウに比べて柔らかい）が混生しています。ウワバミソウは、茎は丸く少し赤みがかかるのに対し、ヤマトキホコリ



タンナサワフタギ

は、少し小型で茎は一部くびれて根元まで緑色ですので確かめて見ましょう。さらに、ミヤマイラクサも見ることができます。このあたりは、台風により木が倒れ、少し光が良く入るようになったためか、他の場所や以前に比べると下の草が良く育っているように感じます。

少し歩を進めると、チドリノキがあります。チドリノキは、カエデのなかまで、葉はカエデらしくないですが、果実はカエデの特徴をよくあらわしています。

さらに木橋を渡ると、いよいよこの沢とも分かれて、急な登りとなります。この登り始めにソバナが姿を見せませんが、年々少なくなってきました。そして、この登りまでの植生が沢沿いに見えていた植生の終わりとなるところです。これから先の植生との違いを観察して見てください。



チドリノキ



地の斜面を覆うように茂るリョウメンシダ

カタツムリのなかま

植物の観察をしながら歩いていると、葉の裏などにカタツムリがついていることがあります。このカタツムリについても観察してみることにしましょう。

カタツムリの仲間は、陸産貝類と呼ばれ、いろいろな種類があり、例えば5cm以上にもなるイズモマイマイやサンインマイマイは、平地に住むものより、なぜかひと回り大型になります。ブナ林にしか生息しないヤマタカマイマイやダイセンニシキマイマイも見つかっています。

海の貝と陸の貝との一番の違いは、海や川の貝はえらで呼吸するのに、陸の貝は肺呼吸をすることです。しかし、乾燥には弱く、殻にフタがないので殻口に薄い膜をはってからだの水分が蒸発するのを防いでいます。また、移動するときには、多量の粘液を出して体を保護しています。カタツムリがはった後が光るのはこの粘液のためです。

カタツムリの他の陸の貝できせるのような形をしたキセルガイの仲間は、個体数が少ないようで、オオナミギセル・チビギセル・ハリマギセル・ホソヒゲギセル・モリヤギセルなどしか発見されていません。

カタツムリは、暖かく、空気の湿っている梅雨の頃が活動にはもってこいの季節です。船通山のカタツムリの仲間については、まだよく調べられていませんので、みなさんも船通山までやってきて、雨降りに出会ったときや、雨上がりでまだ湿気の多いときに注意深く、葉の裏や木の裏をのぞいてみて下さい。何種類もの陸の貝を見つけることができるでしょう。



サンインマイマイ

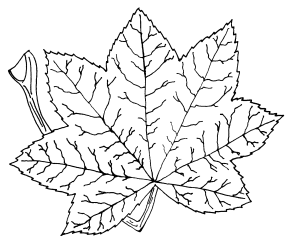


イズモマイマイ

ちょっと
一休み

葉っぱの違い

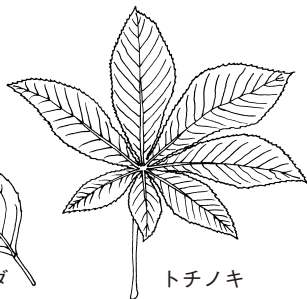
葉っぱの違いを見てみましょう。よく似た葉っぱのどこが違うのでしょうか。大きさ、形、縁の形状、葉脈などなど、たくさんのがわかるとと思います。また、ルーペを使って柔らかい毛があるかないかというところまで見ると、きっと自然観察の達人となります…。



ハリギリ



オヒョウ



トチノキ



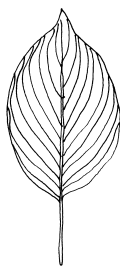
ハナイカダ



ウリノキ



サワグルミ



ミズキ



ダンコウバイ



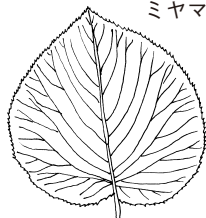
ミヤマハハソ



クマシデ



タンナサワフタギ



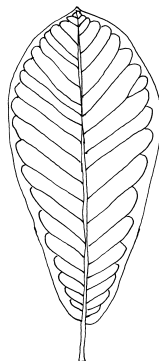
ムシカリ



ミズメ



クリ



ホオノキ

溪流から急登へ

登りになると、沢を流れる水の音が遠のき、風のささやきが聞こえるようになり、植生も少しずつ変化を見せます。ここでよく目につく、カンスゲを見ることにしましょう。これまではリョウメンシダ等に隠された感じでしたが、道沿いにずっと姿を見せていたはず。ここ船通山にあるカンスゲは、カンスゲ、ミヤマカンスゲとオクノカンスゲが見られます。この地方では、このカンスゲとミヤマカンスゲを「ふるり」と呼び、「蓑(みの)」や「はばき」と呼ばれる脚絆の一種の材料とされていました。これらの製品は、柔らかくて温かくその上、水を通さなくて強いという性質をもっていたため、古くから使われていました。



ミヤマカンスゲ

登山道の道沿いでは、下草に特に注意してみましょう。薬用になるシラネセンキュウ、九月頃紫色の美しい花をつけるサンヨウブシ、若芽が食べられるミヤマイラクサやクサソテツそしてカンスゲ類などが生い茂っています。

ふるさとの民具・ふるり

ここで、この地方に古くから伝わるカンスゲの利用について少し詳しく勉強しておきましょう。この地方では、このスゲを「ふるり」と呼んでいます。ふるりは、みのでは長みの・作業みの・腰みの・袖みのの4種類、はばきという脚絆の一種、こしごとという背負いかごなどに製品化しますが、これらは柔らかくて温かく、その上、水を通さないし、強靱なので古くから民具として愛用されてきました。

その加工の方法は、まず、初秋の頃、伸びきったふるりを抜いてきます。採ったふるりは、束ねてふるり池という加工池に約50日漬けて葉肉を腐らせます。この時、特有の悪臭が漂うので決して家屋の近くには作りませんでした。葉肉が腐ると粘りを生じ、この時これを取り出



ミヤマイラクサ

して水洗いしますが、用途によって方法が異なり、みの用のものは、板で叩きながら水流にさらし洗いし、柔軟で光沢のあるものに仕上げ、これを“さらし”といいます。はばき用のものは池からあげたまま水流でさらすので、がさがさして手触りが粗く、これを“がざ”と呼んでいます。水洗いの終わったふろりは、はでにかけて干し、乾燥ふろりとしませす。初秋のふろり採りに始まり、冬季のこたつ作業に終わる長みの（馬木マント・にまにの）やはばき製造は今では作る人もなくなり、その製品さえ見かけなくなっていることは寂しいことです。ワラ細工などと同様に後世に残したい文化のひとつです。なお、このふろりに使われるスゲは、カンスゲとミヤマカンスゲの2種類で、これより幅の広いオクノカンスゲが使用されることはありません。

急登から横手道へ

急な登りを登りきると、等高線沿いに沿った横手道になります。この横手道は、水路跡と推測され、当時谷水を引き、鉄穴流しに使われていたと考えられます。ここになると、植生が変わったことに気が付くはずです。今まで見慣れたサワグルミはなくなり、ミズナラ、ブナ、ナナカマド、ナツツバキ、イタヤカエデ、ハウチワカエデ、ホオノキ、ヤマザクラ、タムシバ、ヤマボウシ、コシアブラ、アテツマンサクなどの中高木、そして、下の低木もクロモジ、エゾユズリハ、ツルシキミ、ヤマアジサイ、コアジサイ、ミヤマガマズミ、ムシカリなどとなり、一番の変わりようといえば、地面を覆うように繁茂していたリュウメンシダが姿を隠し、ササが一面にはびこっていることです。この植生は、日本海型のブナ林の特徴を示していますが、一方では、タンナサワフタギやコハウチワカエデなどもあり太平洋型ブナ林の姿も見せています。

足元には、タチツボスミレやサンインスミレサイシン、ミヤマカタバミ、コバノフユイチゴ、ガンクビソウ、トキワイカリソウなどが姿をあらわしてきます。ここまでの雰囲気とは違ったさわやかな風と、ゆったりとした道行を楽しみながら、また、周囲の景色を楽しみながらしばらく自然の空気を満喫して下さい。



ヤマボウシ

そして、手の届くような所にヤマボウシが見えます。ヤマボウシは、5～6月頃、白く大きな花をたくさんつけますので良く目立ちます。しかし、花のように見える白いところは、実は総苞といって花ではありません。ほんとうの花は、中心のほうに集まっていますので良く観察して下さい。秋には赤い実をつけ、食べるととてもおいしく、この実を見つけることが山歩きの一つの楽しみとなります。また、紅葉も美しく、秋の山には無くてはならない存在で、船通山のブナ林の中で代表的な樹と言って良いでしょう。ヤマボウシの名は、頭状の花序を僧兵の頭に、総苞片を白い頭巾に見立てたという説があります。

尾根を曲がると少し大きなブナが目に入ります。谷側に倒れそうで倒れないしっかりと根を張っています。谷の方に水路が崩壊しないために切らずに残されたのかも知れません。そんなことを想像してみるのもいいと思います。このブナにまとわりつくように絡まっているのがツルアジサイです。花は、ヤマアジサイに似ています。よくイワガラミと間違われますが、装飾花を見るとその違いに気づきます。

船通山の鳥

ここまで、たくさんの野鳥の声を聞かれたと思いますが、この辺り一帯は、県下でも屈指の森林性の野鳥の宝庫で、約70種が生息しています。中でも、春から初夏にかけては、野鳥たちの繁殖期で、あちこちで美しいさえずりが聞かれます。時に美しい鳥に遭遇することもあります。

鳥のさえずりにはいくつかの意味があるといわれています。また、さえずりに対して地鳴きと呼ばれている鳴き声もあります。この2つはおおざっぱに分けると、さえずりは人間の歌に相当し、地鳴きは合図に相当するものといわれています。さえずりは繁殖期に聞かれる鳴き声でもあります。例えば、ウグイスの“ホーホケキョ”はさえずりであり、“チャッチャツ”は地鳴きです。

たくさんの野鳥を見かけても名前が分からないのでつまらないと思う人には、姿とは別に鳴き声を記録することをおすすめします。野鳥は種類により鳴き声も大変違い、それぞれの特徴をもっています。特に繁殖期のさえずりは、地鳴きの判別のむずかしさに比べれば、数倍もやさしいものです。

このさえずりを覚えるため、よく人の声におきかえて覚えることがあります。これを「聞きなし」といいます。一般的な聞きなしは次表の通りですが、皆さんも自分なりの聞きなしを作って鳴き声を覚えておきましょう。

鳥名	地鳴き	さえすり
うぐいす	チャッ チャッ	ホーホケキョ
いかる	キョッ キョッ	キーコーキー
ホオジロ	チチッ チチッ	一筆路上仕り候
メジロ	チーチー	長兵衛、忠兵衛、長忠兵衛
サンコウチョウ	ジッ又はギッ	ツキヒホイ ホイホイホイ
シジュウカラ	チッチッ又はジクジク	ツツビー ツツビー
アオジ	チッチッ	チュッチンチュルリーティーリュリー
ヒバリ	ビルルッ ビルルッ	ピーチク ピーチク チュク
ヤマガラ	ニーニーニ、ピーピーピー	ツーツーピー ツーツーピー
エナガ	ジュリリリリリ…	ツイシシシシ又はツイリリリ
ミソサザイ	チョッ チョッ	ピビスクスケスチルチルビョロビョロヒリヒリリ…ルリリル
トラツグミ	シーツ	ヒーヒーー ヒーヒーー
センダイムシクイ		焼酎一杯 グイー
キジハト		デデポーポー デデポーポー
ヤイロチョウ		白ベン 黒ベン又はホーヘン ホーヘン
ツツドリ		ホポー ホポー又はホホー ホホー

ちよつと
一休み

ツルアジサイとイワガラミ

どちらもユキノシタの仲間で、花はいずれもよく似ていますが、ツルアジサイの装飾花の萼片は普通 4 個で、イワガラミの装飾花の萼片は 1 個ですので、花を見ればその違いがよくわかります。また、葉っぱをよく見てみると、周囲の鋸歯の違いが解ります。ツルアジサイは、葉の鋸歯が片側 30 個以上と小さいのに対し、イワガラミは、片側 20 個以下と少なく、もむと青臭いのが特徴です。冬には、冬芽と葉っぱが落ちた跡を見てみましょう。冬芽は細長く、葉痕が三日月形なのがツルアジサイ、卵形で葉痕が逆三角形なのがイワガラミです。その他、樹皮や葉脈なども細かく観察するとその違いがわかりますので観察してみましょう。



ツルアジサイ



イワガラミ

横手道を行く

この谷を回り込むと登山道の上にブナ林が広がります。ブナの白い木肌とまっすぐ上に伸びた幹に、木々を取巻く低木や笹が、きれいなブナ林の典型を見せています。春の芽吹き、新緑の色、夏の濃い緑色、秋の落葉、そして冬には厳しい自然の中で育つ木のたくましさを見せてくれます。

周りをエゾズリハやハイイヌガヤ、チャボガヤ、ツルシキミなどの常緑樹、ムシカリやダイセンミツバツツジ、ウスギヨウラク、ミヤマガマズミ、クロモジなどの低木、さらに、ナナカマドやリョウブ、ハウチワカエデ等の中高木が見えます。ここから見えるブナ林は、私たちにひと時の心の安らぎを与えてくれます。

ここ船通山は、人の手の加わった自然林ですが、山の木々による水を保つ能力、洪水や土砂崩れを防ぐ働きをよく見せています。町の中のいろいろなところで災害が起こるほどの大雨の年でも、ここ船通山ではほとんど災害はありませんでした。ただ、台風や、大雪には、さすがに大木となりますと倒れたり、枝が折れたりしてその周辺の環境が変わり、植生が変わることがあり、大きな自然の力を感じさせます。

ここでブナについて勉強しましょう。落葉広葉樹林の天然林の代表ともいえる森林がブナ林です。ブナは涼しい土地に多い樹木ですから西日本の低地では、夏の暑さに耐え切れず生きていけません。船通山をはじめ、吾妻山、三瓶山、安蔵寺山など



ブナ林

の高地にわずかに残っています。どうしてこんな山の上だけにポツンポツンと残っているのでしょうか。

今から2万年前、地球がずっと寒かった時代がありました。ナウマンゾウが生きていた時代です。ブナは、この頃には九州や四国の低地にまで下がってはえていたようです。やがて気候が温暖になってくるにつれ、ブナは山に登って生き延びました。今かろうじて船通山などの山々の高地に残っているブナは、こうした歴史の生き証人であり、大切にしなければならないことが分かってもらえらると思います。

よく調べてみると、ブナ林といっても、場所によってずいぶん違って見えます。ブナ林だけではありませんが、森で一番勢力の強い樹種は何か、他にどのような種類の草が生えているかということで、森の単位で名前を付けます。ブナ林の場合、日本海側ブナ林と太平洋側ブナ林とは種類の組み合わせが、はっきり違っていることが知られています。日本海側のブナ林は、チシマザサ、ハイヌガヤ、エゾユズリハ、オオバクロモジなどが出てくるのが特徴です。太平洋側のブナ林は、スズタケブナ林と呼ばれ、スズタケ、ミヤコザサ、コハウチワカエデ、シロモジ、クロモジ、タンナサワフタギなどが優先しています。

近年、日本中のブナ林が詳しく調べられ、日本海側に3つ、太平洋側に4つの型のブナ林があることがわかっています。

船通山のブナ林は、高木層はミズナラ、ウリハダカエデ、ハウチワカエデ、オオオイタヤメイゲツ、クマシデ、ホオノキ、ナツツバキなどが混在し、亜高木にリョウブ、ナツツバキ、アズキナシ、ヤマボウシなど、低木には、クロモジが圧倒的に多く、他にムシカリ、タンナサワフタギ、ヒメモチ、エゾユズリハ、ハイヌツゲ、アテツマンサクなど、草本には、オオカニコウモリ、チュウゴクザサ、チゴユリ、ミヤマカタバミ、ユキザサ、サンインスミレサイシン、サンヨウブシ、ツクバネソウ、オクノカンズゲ、クサソテツなど多くの種類が見られます。タンナサワフタギやムシカリは太平洋側のブナ林に多く、エゾユズリハやハイヌガヤは日本海側



ムシカリ (オオカメノキ)

のブナ林を特徴づける常緑の低木ですが、ここでは、これらの低木がみなあらわれていません。

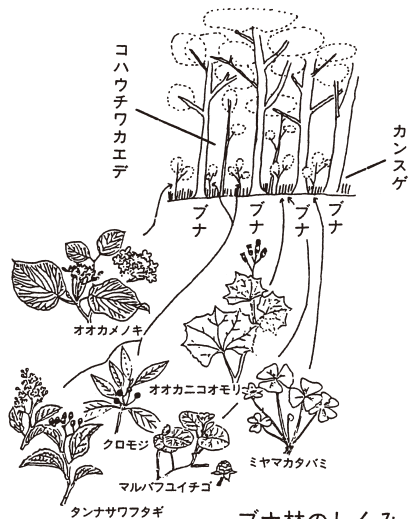
船通山のブナ林は、このように日本海側のブナ林を特徴づける草本や低木があるかと思うと、太平洋側ブナ林を特徴づけるものも見られ、両方の型の移行帯と考えられますが、低木層にクロモジが優先していることから、太平洋型ブナ林の性格をもつ日本海型ブナ林「ブナークロモジ群集」と単位づけられています。

ブナは、日本固有の植物でもあり、フジミドリシジミ(チョウ)をはじめとしてブナ林だけに生息する生物もたくさんいます。ブナの木陰で疲れた体を休めるひと時、ブナのたどってきた道を思ってみてください。

ここから尾根をぐるりとまわりもう一つの谷に出ます。この谷には、一年を通じて水が流れています。上を見ると、石積みが見えます。防災のためと思われるのですが、鉄穴流しを行うために水を溜める目的で作られたようでもあります。ここでは、石の下などにブチサンショウウオをとときどき見ることができます。

ここで水を補給して登りましょう。

この辺りで、今まで上に見上げていたホオノキがよく見えます。灰白色のすべすべしたはだをもち、20cm以上もあるよく広がった大きな葉が特徴的です。5～6月頃には、枝先に香りのよいモクレンに似た大きな白い花をつけるので遠くからでもよく目立ちます。古くから食物を包む柏葉として利用されており、今でも柏モチをホオの葉で包んでいる地方もあります。材は柔らかく加工しやすいので、建具材として使われる他、箱材・製図版・ゲタの歯・ピアノの鍵板そして版画の板などに使われます。



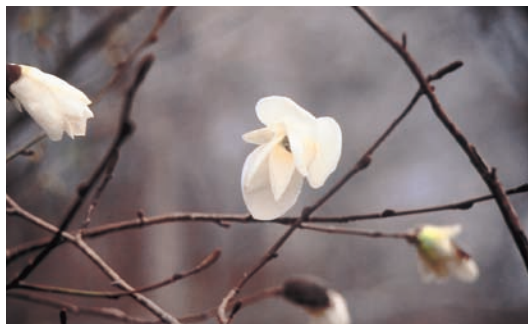
ブナ林のしくみ

「県民の森自然ガイド」より

同じような白く大きな樹の花にコブシとタムシバがあります。ホオノキよりかなり早く、木々の新しい芽吹きがやっと始まった頃にぽっかりと山肌に白い大きな花を浮かび上がらせ、人目をひきつけます。コブシという名は集合果が握りこぶしに似ているからといわれています。

コブシの蕾に太陽の光が当たると大きくふくらみ、この間から白い花びらを

のぞかせます。この時、花びらの先は必ず北をさします。これは太陽のあたる南側が暖められて北側より早く成長しふくらむため、先端は北をさすことになるわけです。つまり、コブシの花の咲き始めを見れば、どちらが北でどちらが南かすぐわかります。このような植物を方角指標植物といいます。



タムシバ

よく似たタムシバとの区別はなかなかむずかしいところがありますが、コブシは開花と同時に小型の葉が一個、花のすぐ下からでます。その他、葉の形や花芽の形も違いますので、よく観察してみましょう。

ちょっと
一休み

ツルシキミとカラスシキミ

低木の中にツルシキミが良く目につきます。ツルシキミは、ミカン科のなかまで、幹が地を這うのが特徴で、ツルシキミと名づけられています。葉は互生で、長楕円形をし、先は鈍く、春、4～5月円錐花序をだし、香りのある白い花を多数つけ、実は、真冬の12～2月に赤く熟します。

このツルシキミに混じって、葉の先がとがって、長くさび形の葉があるのが確認されます。これがカラスシキミです。カラスシキミは、ジンチョウゲ科のなかまで、花は白く、ツルシキミより少し遅れた6月頃、新梢の先に数個頭上につけますが、実は夏に赤く熟してしまいます。この赤く熟した実がツルシキミに似ているのでカラスシキミと名付けられています。



ツルシキミ

このように、植物の

中には、属する科が違うのにどこかが似ているため、その名をもらって付けられたものがたくさんあります。このようなちょっとしたことを調べてみるのも面白いのではないのでしょうか。



カラスシキミ

セミのなかま

森の昆虫の代表的なものにセミがあります。皆さんもセミには子どもの頃の思い出など特別の愛着があるのではないのでしょうか。

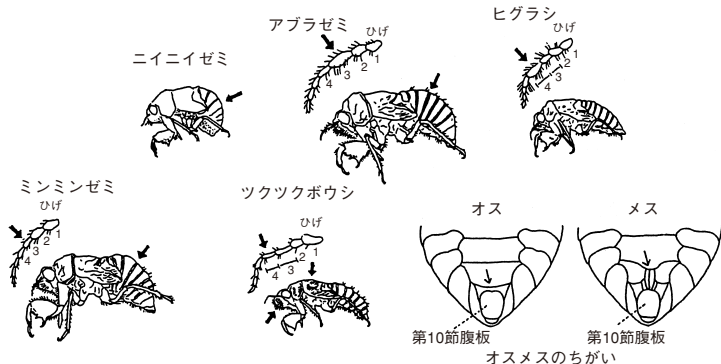
晴れた日中、ジ〜〜〜と低い声でさかんに鳴いているのはエゾゼミです。エゾゼミは、北方系のセミで平地には少なく、船通山のような山地に多くみられる種類です。朝や夕方の涼しい時にカナカナカナとかん高い声で鳴くのはヒグラシです。ヒグラシは、日照に敏感で、日中には鳴き声を聞くことができません。おなじみのニイニイゼミやアブラゼミ、ミンミンゼミなどは、皆さんもよくご存知と思います。

さて、鳴き声は聞かれるけれど、高い樹の上にいるセミはなかなかその姿を見せてくれません。ここで、誰でも見つけられるセミのぬけがらの区別法を勉強しておきましょう。

図を参考にして、大きさや触角（ひげ）のちがひ、毛の数などを比べてみて下さい。虫メガネがあれば容易に区別できます。

これを覚えておけば、ある一定範囲のぬけがらを全部集めることにより、セミの種類・個体数（密度）・羽化場所・オスメスの差・抜け穴の位置などいろいろ面白い観察をすることができます。

オスメスの区別は、どの種類でも、腹端をみれば簡単にわかります。図のような割れ目があるのがメスで、オスにはありません。ドロをつけているセミ（ニイニイゼミなど）では、ぬらしたフデでドロを落としてから調べるとよいでしょう。（この割れ目は、親になってから産卵管になるところです。）



横手道から愛宕道へ

ここからジグザクの愛宕道での登りになります。植生は、ブナ、ミズナラを中心とした林となり、イタヤカエデ、ヤマザクラ、ナツツバキが彩りを添えてくれます。

ここにミズメという木があります。まだ、小さくて解りにくいかもしれませんが、さがしてみましょ。ミズメはカバノキの仲間で、その特徴から、ヨグソミネバリという別名をもっています。ミズメという名前は、樹皮を傷つけると水のような樹液がでることからつけられましたが、この臭いが今で言うとサロメチルの臭いがするため、このような別名を持つようになったのです。実際にどんな匂いがするか試してみましょ。また、登山道沿いに大きな木も見るができますので探して見ましょ。

登るにつれて木の高さが低くなっているのに気が付きます。少しずつ稜線に近づいてきているため、風の影響を受けて高くならないのです。さらに、今までは高木の下で頑張っていたナツツバキの大きいのに気がつくはず。周りの木が大きくならないため太陽の光を十分に受けているためだと思います。また、ブナもずんぐりとした大きな木が見えてきますが、切られずに残されたものだと思います。

足元にはハバヤマボクチ（方言名ほうこ〜若葉はよもぎのかわりに餅に入れる。）、サンインスマレサイシンや、タチツボスマレ、ミヤマカタバミ、チゴユリ、ユキザサやコバノフユイチゴを見ることができます。



サンインスマレサイシン

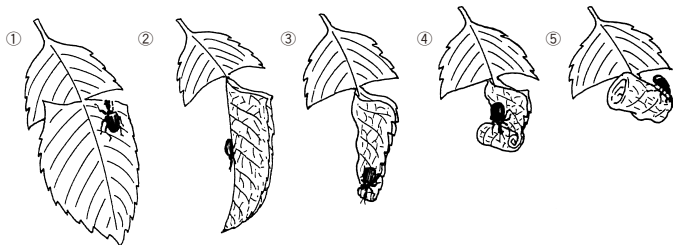
ゆりかご作りの名人

新緑の頃、登山道を歩いていると、若葉がきれいに葉巻タバコのようにまるとなつたものを見つけます。なんだと思いますか。これをぐるぐるともどしてみると、小さな卵を発見します。そう、これがオトシブミのゆりかごです。

オトシブミという名は、このゆりかごの形が、昔の巻紙に書かれた手紙に似ていることから「落とし文」と呼ばれるようになったものです。ゆりかごを作るのはメスで、1cmにも満たない小さな虫が1枚の葉っぱを巻いて作るさまは感動的でもあります。1つのゆりかごには1個の卵を産みつけるのですが、たった一つ産むために、何時間もかけてゆりかご作りの重労働をするのです。このゆりかごは名前のおと卵や幼虫の住みかとなるだけではなく、幼虫の食糧にもなり、幼虫はこの中でサナギになって羽化するとここから出てくるわけです。

オトシブミの種類によって使う葉の種類や、作り方の細かい点は違うようですが、基本的な方法は共通しています。まず、メスは葉の上を1枚1枚歩き回って、ゆりかごにする葉を決めます。次に、その葉の上を何度も歩き回りながら、葉の点検をしたり大きさを図ったりします。そして、葉をしおれさせるために、葉の根元近くに切れ込みをいれ、何箇所も噛み跡をつけます。葉の真中の葉脈は傷をつけて折れ曲がりやすくします。そして、主脈のすぐ脇を真中にして、縦に2つ折にし、先の方から2枚重ねのまま巻きはじめます。葉っぱの縁もちゃんと内側に巻き込むのですからたいしたもの。少し巻いたところで穴を開け卵を産み付けると、最後まで巻きます。そこで、これがとけないように最後に残った部分をそり返し、巻きが戻らなくなると出来上がりです。このままでは、下に落としてしまうものいろいろです。巻き方も、右、左色々で、決まっていらないようですのでよく観察してみましょう。

ヒメクロオトシブミのゆりかごのつくりかた



① 両側を大あごでかみ切る。主脈を残すため葉は枯れない

② 葉のうら側にかみ傷をつけ、巻きやすいようにする

③ 2回ほど巻いた所で、口で穴を開けなかに1個卵を産む

④ ゆりかごが解けないよう葉の縁を内側に入れる

⑤ 巻き終わってから切り落とす種類もある

愛宕道の途中、大きなツタウルシを見ることができます。木にからみついて、まるでこの木の枝のように枝をだしています。このように大きくなると枝を広げるのが特徴で、他のツル性植物との大きな違いともいえます。このツタウルシは、ラッコールという漆成分を含んでおり、触れるとひどくかぶれますので注意が必要です。ツタウルシの名前は、ツタに似たウルシという意味で、幼木の葉はツタによく似て、粗い鋸葉があります。大きくなるとそれがなくなり全縁の葉となります。この葉の紅葉はきれいで、つとりたくなりますが、かぶれる恐れがありますので十分に注意しましょう。また、登山道脇にも幼木がたくさんありますので、気をつけて観察しましょう。



ツタウルシ

ちょっと
一休み

秋の味覚

春先の山菜採りにならんで、山の楽しみに秋の木の实、きのこの収穫があります。

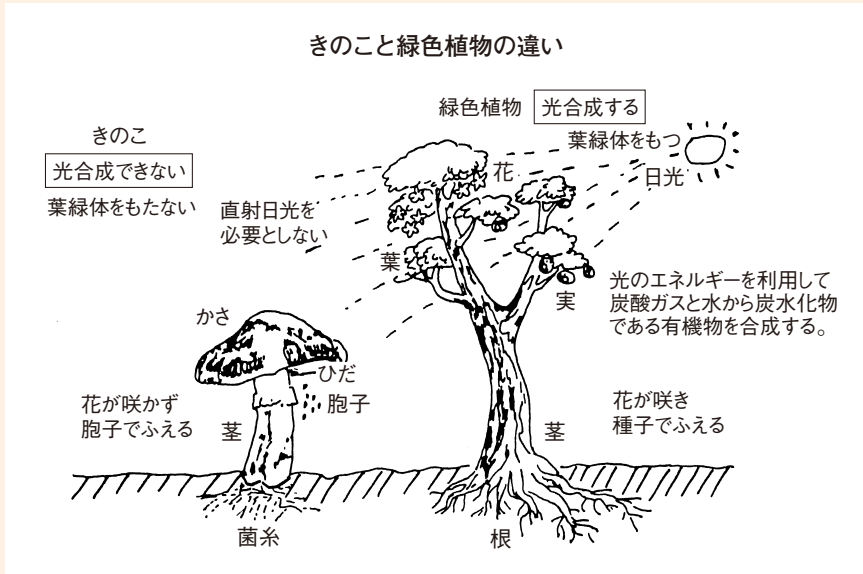
サルナシ（どうらん）、マツブサ（まつがぶ）ヤマボウシ（おつき）、ミヤマガmazumi（かめがら）、アケビ、ヤマブドウ等の実、そのまま食べるのもおいしいものですが、なんと言っても種々のお酒に漬け込んで、自家製の果実種を楽しむのが一番です。果実酒には、ハイイヌガヤ（へんだー）やカマツカ等の実も利用されます。

また、クリをはじめ、ブナの実、トチの実などの秋の木の实もそれぞれに楽しみの一つです。ただし、トチの実は、しっかりあく抜きをすることが必要です。変わったところでは、オニグルミの実、クルミに似ておいしくいただくことができます。

木の实とならんで家族で楽しめるのがきのこ狩りです。きのこといえば、お店で売っているシイタケやシメジ、あるいは毒きのこのイメージを思い浮べる人がいるかもしれませんが、この機会にきのこについて勉強しておきましょう。

きのこの体は、根・茎・葉の区別がなく、カビと同じ菌糸でできています。菌糸はクモの糸のようで、細胞が糸のように細長くつながったものです。

植物は根から土中の水や養分をとり、葉で光合成してでん粉をつくりませんが、きのこは葉緑素をもっていないため、自分で養分をつくることができません。そのため、菌糸が栄養となるものに広がり、その養分をとって育ちます。光合成しないので、育つには日光は必要ありません。菌糸は、枯れ木・落ち葉などを栄養にして、適度な水分と湿度があればどんどん広がります。このように、きのこは森の中の植物の残骸や動物の死骸を腐らせ、きれいに分解する重要な働きをしています。



やがてちょっとした広場に着きます。ここに大きなブナがあります。樹齢はいくらでしょうか。風雪に耐えて、かなりの年月を数えています。

近くに大きなナツツバキがあります。これまでもたくさんのナツツバキの樹を見てきたと思います。ナツツバキは、その名のとおり夏に5～7cmくらいの白いツバキに似た花を付けます。別名シャラノキとも呼ばれ、仏教の聖樹である沙羅双樹としてよく寺院などに植えられていたようで、時々大木が残っているところもあります。幹の肌はつるつるして特長があり、庭木のサルスベリ（百日紅）に似ていることから、サルスベリと呼ばれることもあります。大木になると、赤褐色の皮が薄くはがれ、すべすべした肌をしてるので良く目立ちます。材質は堅く、床柱・彫刻などに用いられ、上質の炭の材料としてもよく使われました。

この肌とよく似ている樹が見えます。樹の肌だけみるとそっくりなのがリョウブという樹です。リョウブは、樹皮は茶褐色なのですが、古い樹になると不規則な薄片となって剥がれ落ち、まだら模様になり、ナツツバキの樹皮によく似てきます。花は、夏に10～20cmの総状花序を出し、白い花を多数つけます。また、葉は枝先にまとまってつけるなど、よく観察すれば、ナツツバキとリョウブの違いが良く分かりますので、じっくり見てみましょう。

また、ナガバモミジイチゴ（方言名さがりいちご・すだれいちご）を見ることができます。これは日本特産で、初夏、運がよければ黄色のとてもおいしい果実を食べることができるでしょう。

もう少しで鳥上滝コースと合流しますが、低木が多くなります。ツノハシバミ・タニウツギ・タンナサワフタギなどが高木に替わり多くなります。左側にヤマブドウが見えます。滝のコースでも尾根の少し下で見ることができます。ここでも、尾根の下で、しっかり風を避け、日当たりのよいちょっと湿った場所を選んで生育しています。つる性の植物は、林の縁に生育するのですが、ここら辺りが林とかん木群との境界になるのかもしれないね。

合流点近くになると、リョウブ・ナナカマド・カマツカ・ダイセンヤナギなどに変わってきます。そして亀石コースと鳥上滝コースとの合流です。春には、登山道に沿ってカタクリが春の光を浴びて咲き誇っています。ここから頂上まではわずかです。

ここから頂上までは、鳥上滝コースで紹介しています。



リョウブ



ナツツバキ

船通山にみる万葉の花たち

万葉集の中に読まれている花たちの中に、ここ船通山でも見られる花が多くあります。その代表的なものがカタクリで、

もののふの八十少女らが汲みまがふ寺井の上の堅香子の花
 と詠われています。(堅香子がカタクリのこと)

以下、抜粋してみますと

アセビ 磯の上に生ふる馬酔木を手折らめど見すべき君がありと言わなくに
 カツラ 黄葉する時になるらし月人の桂の枝の色づくを見れば
 カエデ わが屋戸に黄変つ鶏冠木見るとに妹を懸けつつ恋いぬ日はなし
 ヤマグワ たらちねの母がその業る蚕すらに願へば衣に着るといふものを
 クリ 三栗の那賀に向かへる曝井の絶えず通はむそこに妻もが
 ヤマザクラ 春雨に争いかねて吾が屋前の桜の花は咲き始めにけり
 ナツツバキ …このゆ糸に、維摩大士は玉体を方丈に疾ましめ、
 釈迦能仁は金容を雙樹に掩したまえり…
 ケヤキ 長谷の五百槻が下に吾が隠せる妻茜さし照れる月夜に人見てむかも
 ナデシコ 野辺見れば石竹の花咲きにけり吾が待つ秋は近づくらしも
 ホオノキ わが背子が捧げて持てる保宝葉あたかも似るか青き蓋
 ユズリハ 古に恋ふる鳥かも弓絃葉の御井の上より鳴きわたり行く

などがあげられます。その他には、マツ、ツツジ、スゲ、スミレ、ヌルデ、ニシ、マユミなどもあります。

万葉時代の植物の呼び名にはいろいろありますので、その解釈によっては、まだまだあげることができるでしょう。たとえばアジサイは、今のような園芸種ではなく、ガクアジサイかヤマアジサイなのでしょう。また、あづさ(梓)とは、弓の材料とすればミズメであろうとか、桜はヤマザクラのこととか拾い上げればいくらでもあります。少し紐解いてみてはいかがでしょうか。

船通山の四季

最後に、船通山の四季について、簡単に説明しましょう。

春

早春、雪解けの沢沿いを歩くと残雪の中から新しい芽吹きが感じられ、アテツマンサクやキブシ、クロモジなどの黄色い花がわれ先にと咲き始めます。

春の日差しが強くなるころ、カタクリが芽を出し、4月下旬から5月初旬に薄紫色の可憐な花を咲かせ、私たちの目を楽しませてくれます。そして、この頃からタムシバやヤマザクラ・ムシカリ・タニウツギ・ヤマボウシなど、春の花が盛りとなるとともに、美しい芽吹きを楽しむことができます。中でも美しいのがイタヤカエデでしょうか。ミズナラも美しい白い色に見えます。芽吹きの色でその樹種が分かり、頂上からの眺めは美しいコントラストを見せてくれます。春の終わりには、緑の濃淡で登山者の目を楽しませてくれます。また、小鳥のさえずりも楽しく、たいくつしない春の船通山です。

夏

春の終わりから夏の初めには、ハクウンボク、ナツツバキ、ミズキなどが白い花を見せ、緑色と良く調和してきます。ひらひらと華麗な舞いを見せるアサギマダラも良いでしょう。そして、緑が色濃く染まった木々と、溪流のせせらぎがひと時の清涼感を与えてくれます。

真夏の一日、頂上は、神話の世界を感じさせる行事があります。毎年7月28日に開催される^{せんようさい}宣揚祭です。この日は、仁多と日野の神主が一同に集い神事が行われ、頂上は100人を超える人でいっぱいになります。

秋

滝コースからの尾根部では、足元に白い小さな花、ウメバチソウが咲き、一面に広がります。そして、一足先に木々が色づき、秋色が濃くなってきます。赤色に染まるカエデや黄色のクロモジ、そして少しずつ枯れ葉色になっていきます。落ち葉を踏みしめ登る頃は、木枯らしが吹く頃でしょうか。カサカサと音を鳴らして歩くと一抹の寂しさを感じますが、これが晩秋というものでしょう。しかし、落ち葉で木を感じ、葉の落ちた跡を見ればもう来春の準備ができているのが確認でき、自然のたくましさを感じさせてくれます。



一面の雪景色となりますが、頂上は吹きさらしとなるため少々の雪では積りません。冬晴れの澄んだピーンと張った空気の中で見る初日の出は最高です。ここでも、360度のパノラマが私たちの目を楽しませてくれます。木々たちは、もうすっかり春の準備を整え、ムシカリもクロモジも花芽をしっかりと膨らませ、キブシはすでに花穂を出し、春の日差しを待っています。

終わりに

船通山の自然の一端を紹介しましたが、いかがでしたでしょうか。ここに生息する植物や動物たちが自然のなかで森の働きにかかわり、それがどのように人間の生活の結びついているのかももう一度考えてみましょう。

1. 森の経済的役割があります。
2. 二酸化炭素を吸収する働きもあります。
3. 気候をやわらげる働きをしています。
4. 風を防ぐ働きをしています。
5. 洪水や土砂崩れを防ぐ働きをしています。
6. 音を防ぐ働きもしています。
7. 酸素の生産工場です。
8. レクリエーションの場です。
9. 動物のすみかです。



ササユリ

このような自然観察で学んで欲しいのは、この世界には「生き物がいっぱいいる」という事実です。1種類の生き物をとっても、その働きは複雑で多面的なのに、生き物の種類は何百万種とあるのです。生き物たちはそれぞれ生産者・捕食者・分解者となり、お互いに複雑にからみあって一つの世界、生態系をつくりあげています。

生き物の個性の違いとか相互関係とか、長い歴史をかけてでき上がってきたという現実の自然界の複雑さ、多様さが少しでも理解していただければ幸いです。

また、ここ船通山の自然、大きな自然界の中のたった一つの例なのですが、ここにだけしかないかけがえのない自然なのです。この自然を守ろうとしている人たちがいることを理解し、自分たちに何ができるか、何かすることはないだろうか、興味を持っていただければと思います。

觀察記錄【 年 月 日 曜日 天氣 】

觀察記錄【 年 月 日 曜日 天氣 】

観察記録【 年 月 日 曜日 天気 】

観察記録【 年 月 日 曜日 天気 】

色をつけてみよう



カタクリ

編集後記

今回の船通山自然観察モデルコースガイドブックは、昭和61年に作成したガイドブックの改訂版です。再編に伴い亀石コースも新たに追加したことで山全体の魅力をお伝えできるガイドブックに仕上がったと思います。しかしながら、四季折々の自然を楽しませてくれる船通山には、まだまだ伝えきれない自然がたくさんあります。また、山の植生やコースの状況も時と共に変わっていくと思われます。実際に歩いていただいております点やご意見などを是非お聞かせ下さい。

なお、この改訂版ガイドブックの作成にあたっては、横田山の会に執筆いただきました。その他多くの関係者の方にご協力いただき完成しましたことを、紙上をお借りして厚くお礼申し上げます。

参考引用文献

船通山自然観察ガイドブック（初版）

横田町史

危険生物

万葉の植物

たたら製鉄の手びき 鉄の道文化圏推進協議会

平成20年3月改訂版発行

編集・発行 島根県環境生活部

自然環境課

電話 (0852) 22 - 6377

印刷 渡部印刷株式会社

索引

アイノミドリシジミ	29	カミキリムシ	28
アカマツ	36	カメムシ	27
アカモノ	34	カラスシキミ	58・59
アキアカネ	38	カラスシジミ	15
アキオサムシ	22	カロチノイド	31
アキグミ	36	カワラナデシコ	38
アキニレ	15	鉄穴(かんな)流し	12
アキノキリンソウ	36	ガングビソウ	52
アケビ	42・62	カンスゲ	43・51・52
アサギマダラ	29	キバナアキギリ(ことじそう)	21
アシウスギ(ウラスギ)	36	キブシ	14・15・17・42
アシナガバチ	8	キュウシュウクロナガオサムシ	22
アズキナシ	56	クサウラベニタケ	11
アセビ	34・36・65	クサソテツ(ごごみ)	16・21・23・25・48・51・56
アテツマンサク	14・16・17・52・56	クスノキ	16
アブラゼミ	59	クマシテ	16・42・50・56
アブラチャン	17	クマノミスキ	15・42
アリ	46	クリ	15・31・50・62・65
アワブキ	22	クルマバソウ	43
アワフキ	27	クロナガオサムシ	22
アントシアン	31	クロヒカゲ	28
石割櫻(けやき)	25	クロモジ	17・27・31・32・33・36・52・55・56
イズモマイマイ	49	ケヤキ	22・32・47・65
イタドリ	14	コアジサイ	32・33・52
イタヤカエデ	27・31・38・52・60	ゴギ(コギ)	18
イチイ	36・37	コシアブラ(バカノキ)	24・25・32・33・52
イッポンシメジ	11	コハウチワカエデ	52・56
イロハモミジ	31	コバノフユイチゴ	52・60
イワガラミ	53・54	コブシ	57・58
ウグイス	53	ゴマギ	32・42
ウスギヨウラク	55	コマユミ	37
ウツギ	14・15	コミネカエデ	31
ウメバチソウ	36	ササユリ	37・67
ウラクロシジミ	16	ササラダニ	46
ウラボネホテイシメジ	11	ザトウムシ	46
ウリカエデ	31	サルナシ(どうらん)	14・42・43・47・62
ウリノキ	15・21・43・48・50	サワグルミ	15・21・43・50・52
ウリハダカエデ	27・31・36・37・56	サンインシロカネソウ	21・44
ウワバミソウ(たきな)	21・24・25・43・48	サンインスマレサイシン	43・52・56・60
エゾカタピロオサムシ	22	サンイントリカブト	21
エゾゼミ	59	サンインマイマイ	49
エゾユズリハ	27・52・55・56	サンヨウブシ	21・42・51・56
エゾミドリシジミ	29	シイタケ	11・62
エライオソーム	40	シオデ	24・25
エルモンヒラタカゲロウ	19	シシウド	21
エンゴサク	42	シナノキ(やまがき)	22
エンレイソウ	37・42・43	シマトビケラ	19
オオイタヤマイゲツ	31・56	ジョウザンミドリシジミ	29
オオオサムシ	22	シラネセンキュウ	51
オオカニコウモリ	27・56	シロモジ	56
オオサンショウウオ(はんざき)	26	ススキ	14
オオナミギセル	49	スズタケ	56
オオバクモロジ	56	スズメバチ	8
オカタツナミソウ	42	スプリング・エフェメラル	41
オクノカンスゲ	51・52・56	セズジヒメハナカミキリ	28
オクモミジハグマ	23	ゾウムシ	28
オサムシ	22	ソデ群落	14
オトシブミ	28・61	ソバナ	48
オニグルミ	42・43・62	ソヨゴ	34
オヒョウ	15・42・50	ダイスギ	36
カエデ	65	ダイセンニシキマイマイ	49
カキシメジ	11	ダイセンミツバツツジ	34・36・55
ガクアジサイ	33	ダイセンヤナギ	36・37・38・64
カゲロウ	19	たたら	12
カタクリ	34・36・37・38・40・64・65	タチシオデ	24・42
カツラ	32・47・50・65	タチツボスミレ	52・60
カニムシ	46	タニイソギ	16
カマツカ	36・37・62・64	タニウツギ	34・36・37・64

玉鋼 (はがね)	12
タムシバ	32・43・52・57・58
タラノキ	14・24・25
ダンコウバイ	16・17・42・50
タンナサワフタギ	15・21・43・48・50・52・56・64
チゴユリ	27・56・60
チシマザサ	56
チドリノキ	31・48
チビギセル	49
チャイロヒメハナカミキリ	28
チャボガヤ	15・43・44・55
チャルメルソウ	43
チュウゴクザサ	38・56
ツキノワグマ	15
ツキヨタケ	11
ツクバネソウ	37・42・56
ツタウルシ	9・24・62
ツツドリ	21
ツノハシバミ	33・64
ツルアジサイ	14・24・25・43・53・54
ツルシキミ	27・52・55・58
テングタケ	11
テンナンショウ	10
トキワイカリソウ	52
トチノキ	43・47・50・62
トビケラ	19
トビムシ	46
トリカブト	9・21・24
ドロムシ	19
ナガバモミジイチゴ	64
ナツツバキ	16・27・32・33・43・52・56・60・63・64・65
ナツトウダイ	42
ナデシコ	65
ナナカマド	32・36・37・52・55・64
ニイニイゼミ	59
ニガクリタケ	11
ヌルデ	14
ネコノメソウ	21・43
ノグルミ	43
ノブキ	21
ハイイヌガヤ (へんだー)	15・43・44・55・56・62
ハイイヌツゲ	36・56
ハウチワカエデ	15・21・31・43・52・55・56
ハクウンボク	15・21・22・23・27・32・43
ハコネサンショウウオ	26・27
ハサミムシ	46
ハシリドコロ	9・21・22・24・43
ハナイカダ (ままごな)	21・25・50
ハナホウキタケ	11
ハバヤマボクチ	60
ハムシ	28
ハリギリ	24・25・33・50
ハリマギセル	49
ハルニレ	15
ヒカゲノミツバ	24・25
ヒグラシ	59
ヒダサンショウウオ	26・27
ヒメキマダラヒカゲ	28
ヒメコブヤハスカミキリ	22
ヒメハギ	38
ヒメハナカミキリ	28
ヒメモチ	56
ヒラタケ	11
フジミドリシジミ	57
フタスジモンカゲロウ	19
フチサンショウウオ	26・27・57
ブナ	27・32・38・52・53・55・56・57・60・62・63
ブナークロモジ群集	57
フロバフェン	31

ふるり	51
ヘビトンボ	19
ホウチャクソウ	10
ホオノキ	15・21・43・50・52・56・57・65
ホソバノウリハダカエデ	27
ホソヒゲギセル	49
ホツツジ	34・36・38
マイマイカブリ	22
まさ土	12
マツボ (かつがぶ)	42・62
マムシ	5・24
マルハナバチ	8
マンサク	16
マント群落	14
ミスキ	15・43・50
ミスタバコ	48
ミスナラ	27・31・32・38・43・52・56・60
ミスメ (ヨグソミネバリ)	50・60
ミソザサイ	21
ミツバチ	8
ミミズ	22・46
ミヤマイラクサ (めら)	10・16・21・23・25・48・51
ミヤマオビキノコムシ	22
ミヤマカタバミ	21・42・52・56・60
ミヤマガマズミ (かめがら)	52・55・62
ミヤマカンスゲ	51・52
ミヤコザサ	56
ミヤマハハソ	42・50
ミンミンゼミ	59
ムカシトンボ	19
ムカデ	46
ムキタケ	11
ムシカリ (オオカメノキ)	27・33・50・52・55・56
ムラサキマユミ	27
メスアカミドリシジミ	29
モミジガサ (しょがな・しょぼな)	23・25
モリアザミ (やまごぼう)	25
モリヤギセル	49
ヤグルマソウ	48
ヤコンオサムシ	22
ヤスデ	46
ヤブデマリ	43
ヤマアジサイ	32・33・52
ヤマウルシ	10・32・36・37
ヤマカガシ	6
ヤマガラ	21
ヤマキマダラヒカゲ	28
ヤマグワ	32・65
ヤマザクラ	16・21・31・32・38・42・43・52・60・65
ヤマジノホトトギス	27
ヤマジャクヤク	21・42
ヤマタカマイマイ	49
ヤマツツジ	34
ヤマトキホコリ	24・48
ヤミノイモ (むかひ)	25
ヤマハノノキ	22
ヤマブドウ	33・62・64
ヤマボウシ (おつき)	32・52・53・56・62
ユキザサ	56・60
ユズリハ	65
ヨコバイ	27
ヨツバヒヨドリ	29・38
ラショウモンカスラ	42
リョウブ	15・32・33・36・37・55・56・64
リョウメンシダ	16・21・43・48・52
ルイヨウボタン	42
レンゲツツジ	36
ワラジムシ	46



表紙のことば

カタクリ(ユリ科)

山林中に生える多年生草で、古名をカタカゴといい“かたむいた籠状の花”という意味です。下向きで花弁がそりかえる形から連想したものでしょう。早春、地中深くにある鱗茎から、何年もの間たった1枚の葉を出し、花を咲かせるほどに鱗茎が成長すると、2枚の葉を出し、1本の茎にたったひとつの花をつけます。淡い紅紫色の花で、中央にサクラ形の紋のある愛らしい形をしており、早春の船通山の頂上一帯を彩ります。

県内でも、船通山の頂上のような群生は珍しいのですが、近年、根こそぎ持ち帰る人が絶えないことは残念なことです。地元では、守る運動を行っていますが、貴重な自然の財産をみんなで守ることが必要です。持ち帰るものは、ゴミと写真、スケッチだけにして自然観察のマナーをまもりましょう。

(国定公園ですので、採取した者は罰せられます。)